

第六回

若山牧水みなかみ紀行短歌大会

作品集



# 一般の部 入賞・入選作品

本大会では、できる限り多くの方が入賞・入選できるように、原則として一人一賞とさせていただきます。

最優秀賞 題詠「文」 一首

母の字と一目でわかる父の名の手紙を添へて文旦届く

東京都町田市

谷川

治

最優秀賞

自由題

一首

ラグビーのビデオジャツジの映像に何度も映る冬のたんぽぽ

愛知県名古屋市

清水

良郎

優秀賞

題詠「文」二首

蜻蛉は出されなかつた文のごと水面を滑る翅震わせて

神奈川県相模原市

岩瀬

夏子

氷河にて凍れるようにフロッキー・ディスクの文字は溶け出さぬまま

群馬県藤岡市

清水

静子

優秀賞

自由題

二首

「あ、そうか」とうなずく母が愉たのしくて同じ話を何度でもする

秋田県秋田市

加藤 隆枝

約束を果たし得ぬまま転出し蜂の子とりもうやむやとなる

埼玉県所沢市

若山 巖

選者賞・伊藤一彦選 題詠「文」 二首

父がいて何でも出てきた文机は主を失い魔力は消えた

群馬県高崎市

大塚 とみこ

のり弁公文書のニュースを食らい向かう非正規ブラック派遣

大阪府羽曳野市

凜 七星



選者賞・伊藤一彦選

自由題

二首

母だからだからなんでもわたしなのザクザクたまる千切りの嵩

群馬県みなかみ町

小室

史

五月雨をあつめて早し最上川　そ、そんな悠長な　松尾さん

群馬県みなかみ町

松浦

覺

選者賞・小島なお選

題詠「文」 二首

文月はふみひろげづきの略なれば書物に映る淡き月影

群馬県みなかみ町

吉田 まゆみ

新月のまどかな夜の質量という文脈にテンペラを練る

群馬県みなかみ町

山崎 杜人

選者賞・小島なお選

自由題

二首

球根を植えるかたえに柴犬は目に涙ため見つめいたりき

京都府舞鶴市

新谷 洋子

秋の陽を遮るものは地球のみ千里浜の海の果てに没りゆく

群馬県高崎市

井田 善啓

入選題詠「文」二十首

定形を少し超ゆるか手秤で叔母への文に切手貼り足す

群馬県みなかみ町 眞庭 義夫

水、料理運びてくるるロボットはまだ注文をとらせてもらへず

群馬県前橋市 松下 昭代

文中の人になりたしハッピーエンド本を閉じれば憂いふたたび

群馬県みなかみ町 三池 幸子

青信号「下之町」の文字下に五号サイズの白き谷川

群馬県みなかみ町 本多 寿美枝

文脈の中の言葉にタグが付き綿毛のごとく青空を飛ぶ

静岡県浜松市 高田 圭

文恵さん元気ですかと書く手紙しかし続かぬ後の言葉が

長野県箕輪町 市川 光男

文才が無きはす無しを孫に言う祖父の恋文祖母得て女房

大阪府大阪市 後藤 憲之

古の文に「夏痩せ鰻食せ」と帰路は匂いをたらふく吸って

東京都足立区 佐藤 春夫

反古にした用紙を再度読み返す文脈はどこから外れしや

愛知県豊橋市 篠田 武子

参観日子の作文に母のことペットの亀の後には父も

秋田県大仙市 鈴木 仁

落選が続いてゐますと文を添へ大き筭五本が届く

宮城県仙台市 角田 正雄

もう買へぬ菓子の袋に残される「はやしや」の文字しばし見つめる

群馬県みなかみ町 奥村 清美

化粧台の 母のメモ帳 そのままに 優しき文字に くちなしの香り

群馬県伊勢崎市 新井 恵美子

退職に寄せ書き貰へば反り合はぬ上司の記した励ましの文

群馬県みどり市 志田 貴志生

孫の名の文といふ字を自らの戒名につけ 夫つま 旅立ちぬ

群馬県みなかみ町 笛木 洋子

蓋裏にも細かに青貝貼りつめし文箱に触れる指先想ふ

山口県山陽小野田市 山縣 満里子

ルーペ出しバラの漢字の文字写す月日のたてば又同じ事

神奈川県横浜市 高山 克子

作文も図画も刺繍もまねしてた妹が吾の心の師匠

群馬県高崎市 松本 由美子

十六文キツクを知らぬ子どもらが指先で操る戦闘ゲーム

群馬県前橋市 中澤 ひろみ

文殊堂に何を願いしか横書きのアラビア文字の絵馬のひとつは

神奈川県愛川町 富田 茂子

入選 自由題 二十首

あなたには負けたくないと言う風に老人ばかりの句会は激す

徳島県阿南市 小畑 定弘

手の平で少しづれてる賽の目に豆腐ゆつくりみそ汁におとす

群馬県みなかみ町 高橋 吟子

また今年梅か桃かは聞けないが隣の庭にピンクのしだれ

群馬県みなかみ町 田中 春枝

もれてくる光を全部遮って深夜のベッドのクリープハイプ

群馬県みなかみ町 篠原 香代

一、五自信ある目に目薬をスマホの光目がぼやけてく

群馬県みなかみ町 篠原 忠



亡き妻の視線追ひくる思ひして鏡の前で着衣を質す<sup>ただ</sup>

群馬県高山村 割田 良次

秋の空と同じ青き車きてデイスサービスのおばあさん消ゆ

新潟県新発田市 三浦 ユリコ

亡き子への思ひは根雪消ゆるごと花に潤ふ長き年経て

群馬県みなかみ町 細川 のぶ子

窓越しの月に一度の面会時間いつも心に言葉が残る

大分県国東市 原 比呂子

過去のこと忘れゆく夫を悲しめど吾を頼れる瞳愛しき

群馬県前橋市 鶴野 敏子

病窓に閉ざされ居れば満開とふ木犀の香を記憶にぞ嗅ぐ

群馬県安中市 新井 八重子

言の葉を指先にのせ（ほら、カワセミ）絵巻のような山間をゆく

東京都武蔵野市 北谷 雪

査定額待つ間の窓を過ぎてゆく児と手をふった特急草津

群馬県渋川市 忽滑谷 三枝子

二千年の眠りから覚めし蓮の花上越の星と語り合ふらむ

愛知県岡崎市 西村 愛美

玉忽やみかんの皮がたまりたるコンポストの蓋に春風の触る

大阪府豊能町 熊ノ郷 紀子

飴色の採用通知見付けたりわが旅立ちを思ひおこせり

群馬県みなかみ町 石坂 喜美江

訪う吾に玄関越しに接触はできぬという叔母 林檎置き帰る

岐阜県飛騨市 横山 美保子

気に入りの柔軟剤に包まれる君のTシャツ私のブラウス

北海道札幌市 後藤 明美

古びたる大看板おおに「豊」一字 堂々坐したり満月の夜

神奈川県藤沢市 近藤 千壽

洪水などなかつたやうに鎮もりて猿の一むれ堰渡りゆく

石川県金沢市 橋本 枝折



# 高校生以下の部 入賞・入選作品

## 高校生以下の部 投稿者内訳

学校名	投稿者数
群馬県太田市立宝泉中学校	175 人
群馬県立桐生高等学校	20 人
群馬県立利根実業高等学校	329 人
長野県塩尻東小学校	10 人
群馬県みなかみ中学校	40 人
群馬県高崎商科大学附属高等学校	8 人
種類別内訳 題 詠 517 首 自由題 927 首 合 計 1,444 首	582 人

最優秀賞 題詠「文」一首

はじまれば別世界なる文化祭まだビスを打つ板に心に

群馬県高崎商科大学附属高等学校

1年

高橋

健太朗

最優秀賞

自由題

一首

液晶をとおして見てる海の青その海の他の色を知らない

群馬県高崎商科大学附属高等学校

2年

松藤

柚

希

優秀賞

題詠「文」二首

色褪せぬ恋文そつと読み返す 後悔なんてなかったように

群馬県高崎商科大学附属高等学校

3年

小川 真美

ローファーで春に残りし文を踏む雪は優しい嘘のかたまり

群馬県高崎商科大学附属高等学校

2年

新井 愛海



優秀賞

自由題 二首

昼過ぎの重たい瞼と時計の針ふいに浮かんだメロスの激怒

群馬県太田市立宝泉中学校

3年

塩田 あまね

いつも言うあいさつおれいありがとう心がきれい完璧な人

群馬県立利根実業高等学校

1年

星野 るりい

選者賞・伊藤一彦選

題詠「文」二首

いにしえの恋する乙女の文たちは今も響くぞ乙女心に

群馬県立利根実業高等学校

1年

工藤

翠

優

「いいコンビ」コメントに書かれるその文字が私にとっての地雷原

群馬県立利根実業高等学校

1年

横坂

優

妃

選者賞・伊藤一彦選 自由題 二首

クラスのねふしぎちゃんがいるんだよでもわたしもねふしぎちゃんだよ

長野県塩尻市立塩尻東小学校

5年

まつざわ ゆあ

スカイツリー見あげて思う人はなぜ高さを競う次はどこだ

群馬県みなかみ町立みなかみ中学校

2年

長島 笑来

選者賞・小島なお選

題詠「文」二首

文末に何かがないとマイナス2点行きたいのかもその先の道

群馬県太田市立宝泉中学校

3年

大関

駿

目を落とし文字を追いかけてゆるゆるとペラリとめくる昼の催花雨

群馬県立利根実業高等学校

1年

本多

心乃美

選者賞・小島なお選 自由題 二首

坂の上金木犀が秋桜に囲まれたからもう届かない

群馬県立利根実業高等学校

3年

生方

綾華

桜散る校庭にぽつんと君がいたこれ見れるのも最期なのかな

群馬県太田市立宝泉中学校

2年

小島

玲奈

入選 題詠「文」 二十首

その言葉一つ一つに責任をその一文字で相手はきずつく

群馬県立利根実業高等学校 1年 関 琉真

感想文何書けばいいの分からない少し涼しい読書の時間

群馬県太田市立宝泉中学校 3年 久保田 小雪

逝きし祖母のブリキの箱に戦時下の祖父の文ありゆるく束ねて

群馬県高崎商科大学附属高等学校 2年 井上 綾乃

文句とは人が傷つくこともある文の中には意図がある

群馬県太田市立宝泉中学校 2年 福澤 翔太

人の心それは繊細ですぐ変わるたった一つの言葉や文章を目にして

群馬県太田市立宝泉中学校 2年 榎原 和紗

不思議だな人の作文を読むだけで人の心が分かってしまう

群馬県太田市立宝泉中学校 2年

青木 優翔

文豪のアニメにひかれて短歌かくすぐ諦める十三の夏

群馬県太田市立宝泉中学校 3年

片山 柊冴

夏の日に文の宿題で母が見る母の爆笑ナンセンスだ

群馬県太田市立宝泉中学校 3年

酒井 俊太朗

書き初めて学校の体育館に響き渡る半紙の音や文鎮の音

群馬県立利根実業高等学校 1年

小林 歩輝

字も雑で文もめっちゃくちゃだけれども幼い子らの愛ある礼状

群馬県立利根実業高等学校 1年

吉澤 幸叶

少しずつ覚えて二語文使ってる君は必死に話してくれる

群馬県立利根実業高等学校 1年 岡田 琴音

夏休みためにためてた作文がおそいかかってくる虎のよう

群馬県立利根実業高等学校 1年 笛木 琉聖

小説の文を書くのは生きる人何かを残したのは死んだ人

群馬県立利根実業高等学校 2年 福井 春

幼き日母が直したあの文字を今や母より上手く書いてる

群馬県立利根実業高等学校 2年 井上 結愛

水上の古くから続く雪文化谷川岳に積もる雪化粧

群馬県立利根実業高等学校 2年 井上 太貴



反省文五千文字ほど書かされて反省の色とは何色だ

群馬県立利根実業高等学校 2年 鈴木 旋瑠

引き出しに三年眠った文を見て最後の夏の音が聞こえる

群馬県立利根実業高等学校 3年 宮田 美咲

君の文字きれいなところも引かれたよ。下手な丸文字好きでいてよね？

群馬県立利根実業高等学校 3年 五畠 玲奈

文はきてヤギに食わせる童謡を口ずさみかける国際電話

群馬県高崎商科大学附属高等学校 1年 今井 沙羅

放課後に時代錯誤の「好きです」を入れた下駄箱アナログの文

群馬県立桐生高等学校 2年 宇田川 梨杏

入選 自由題 二十首

鈴虫が「お邪魔します」と羽鳴らす家の中には招いてないが

群馬県立利根実業高等学校 3年

星野 優里華

拳上げ世界が一つにまとまると戦う拳下がり始める

群馬県太田市立宝泉中学校 2年

長谷川 凌太

友達は約束なんてしなくても心の中でつながりあえる

群馬県太田市立宝泉中学校 2年

友松 明日香

体育着のそでの毛玉が学校の日々を重ねた実りかな

群馬県太田市立宝泉中学校 3年

目黒 杏

夢を見て歩いていてもいつまでも空に飛び立つ風船のまま

群馬県太田市立宝泉中学校 3年

上田 駈

父と母いつしよに歩くあの道は小さい頃とは歩幅が違う

群馬県太田市立宝泉中学校 3年

田中 美遥

海の中もぐってみるとかわいいな小さなフグがいつぱいいるな

群馬県みなかみ町立みなかみ中学校 2年

見城 篤人

盆休みほおずきおほぎに精霊馬祖父の笑顔を思い出しけり

群馬県みなかみ町立みなかみ中学校 2年

林 大翔

川のそば目を閉じきみと笑い合うずっとこうして笑っていたい

群馬県みなかみ町立みなかみ中学校 3年

齋藤 美來

帰り際「じゃあね」と言って笑ってる手を振る君に寂しくなる

群馬県立利根実業高等学校 1年

宮内 茉美

イヤホンで音楽を聞く帰り道誰もいないと思っていたのに

群馬県立利根実業高等学校 2年 後藤 陽香

サツマイモ作業終わりに食べた秋チャイムが鳴って遅れた体育

群馬県立利根実業高等学校 2年 中澤 夢

「頑張って」よくある五文字それでもね君が言うから魔法の言葉

群馬県立利根実業高等学校 3年 高橋 希咲

愛犬はご飯を食べると重くなる散歩をしてもなぜか重くなる

群馬県立利根実業高等学校 3年 高橋 佑奈

長距離走疲れた後の澄んだ風走るのは嫌いでもちよつと好き

群馬県立利根実業高等学校 3年 白井 そら

朝方は寒い秋風吹いている大泣きをしたあの日を想う

群馬県立利根実業高等学校 3年 諸田 祐菜

夢なんていくらあってもいいじゃない神になるのも悪くないよね

群馬県立利根実業高等学校 3年 池田 思奏瑠

ささくれる割り箸タイプの人生飯が食べさえすればいいんだ

群馬県立利根実業高等学校 3年 平澤 舜

茶毛猫と黒猫かさなるハーモニーわらびもちとはやわらかい猫

群馬県高崎商科大学附属高等学校 2年 新井 愛海

抹茶立てる響きがいいと友の言う明日締め切りの課題ある我<sup>あ</sup>に

群馬県高崎商科大学附属高等学校 1年 高崎 明音

# 入賞作品講評

## ◆ 選者紹介

伊藤 一彦(いとう かずひこ)



昭和十八年（1943）宮崎県生まれ。「心の花」選者。読売文学賞、  
迢空賞、斎藤茂吉短歌文学賞などを受賞。現在、牧水の生誕地宮崎県日  
向市の若山牧水記念文学館館長、宮崎県立図書館名誉館長、宮崎県立看  
護大学客員教授。歌集に『海号の歌』、『微笑の歌』、『月の夜声』、『光の  
庭』、『待ち時間』などのほか、『若山牧水―その親和力を読む』、『牧水  
の心を旅する』、『いざ行かむ、まだ見ぬ山へ』、『歌が照らす』などがある。

小島 なお(こじま なお)



昭和六十一年（1986）東京生まれ。歌人である母小島ゆかりの手  
伝いをしていううちに短歌に興味を持ち、青山学院高等部在学中の  
2004年に最年少で角川短歌賞受賞。2016・2020年度「NH  
K短歌」選者。コスモス短歌会所属。同人誌「cocoon」編集委員。その他、  
現代短歌新人賞、駿河梅花文学賞受賞。歌集に『乱反射』、『サリンジャー  
は死んでしまった』、『展開図』などがある。

最優秀賞 一般の部・題詠「文」

母の字と一目でわかる父の名の手紙を添へて文旦届く

東京都町田市 谷川 治

手紙の文面も文旦の送り主の名前も父の名だったのだが、実際は母が書いた手紙である。そんなことはすぐバレると分かっていたの母の行為。父母の愛情を作者は深く感じている。

最優秀賞 一般の部・自由題

ラグビーのビデオジャッジの映像に何度も映る冬のたんぽぽ

愛知県名古屋市長古屋市 清水 良郎

ラインギリギリの際どいプレイだったのだろう。得点になるかどうか何度もくりかえされるVR判定の映像。興奮する観衆の心理とは無関係なほらかな黄色がほっと灯る。

優秀賞 一般の部・題詠「文」 二首

蜻蛉は出されなかつた文のごと水面を滑る翅震わせて

神奈川県相模原市 岩瀬 夏子

比喩が見事に生きている歌である。水面のトンボを見て「出されなかつた文」のようだと新鮮だ。下句の倒置にした描写もいい。手紙をひたすら待っていた切ない心が伝わる。

氷河にて凍れるようにフロッピー・ディスクの文字は溶け出さぬまま

群馬県藤岡市 清水 静子

おそらく二十年以上前の文章が保存されたフロッピーディスク。どんな記憶も薄れてゆくけれど。「氷河」のなかの化石のように、当時の作者の思いまで残っているといい。



優秀賞 一般の部・自由題 二首

「あ、そうか」とうなずく母が愉たのしくて同じ話を何度でもする

秋田県秋田市 加藤 隆枝

うらやましいような母と娘の姿である。さりげない歌い方に見えるが、ベテランの作者の実力だろう。娘の話を何度聞いても喜ぶ母親、その母のためか何度も同じ話をする娘。

約束を果たし得ぬまま転出し蜂の子とりもうやむやとなる

埼玉県所沢市 若山 巖

付き合いのあつたご近所さん。いつか蜂の子とりに一緒に行きましよう、という約束を果たせないまま転居することに。淡く、儂く、けれど大切だった気がかりな縁。

選者賞・伊藤一彦選 一般の部・題詠「文」 二首

父がいて何でも出てきた文机は主を失い魔力は消えた

群馬県高崎市 大塚 とみこ

フミヅクエを略してフヅクエと言う。父が愛用していた文机は年代物を思わせる。幼少期の作者は机にむかっている父によく物を頼んだのだろう。「魔力」の語がきいている。

のり弁公文書のニュースを食らい向かう非正規ブラック派遣

大阪府羽曳野市 凜 七星

のり弁公文書とは黒塗りの多い文書。情報公開の精神に反すると批判の多い文書である。

この語を「食らい」の語で受けたのが手腕で、怒りの下の句が胸に迫る。

選者賞・伊藤一彦選 一般の部・自由題 二首

母だからだからなんでもわたしなのザクザクたまる千切りの嵩

群馬県みなかみ町 小室 史

家族は何事につけ「お母さん、お母さん！」「お母さん、お願い！」と言って母親に頼っているのだ。不満、いや嬉しいか。「ザクザクたまる千切りの嵩」が絶妙である。

五月雨をあつめて早し最上川 そ、そんな悠長な 松尾さん

群馬県みなかみ町 松浦 覺

上の句は芭蕉の「おくのほそ道」の有名な句である。大雨のため最上川が氾濫し、水害が生じている現代からすれば、「そ、そんな悠長な 松尾さん」となる。ウィットが見事。

選者賞・小島なお選 一般の部・題詠「文」 二首

文月はふみひろげづきの略なれば書物に映る淡き月影

群馬県みなかみ町 吉田 まゆみ

文月は旧暦七月のこと。由来にはいくつか説があるが、「ふみひろげづき」は夜風に書物をさらす風習を指すのだろう。いにしえから現代へ、歳月を貫く月光。

新月のまどかな夜の質量という文脈にテンペラを練る

群馬県沼田市 山崎 杜人

月の見えない夜、テンペラ絵の具を練るひととき。まろやかで静謐な夜の時間の手触りが、なめらかな粘度のある絵の具の質感とひとつつながりに感じられる。

選者賞・小島なお選 一般の部・自由題 二首

球根を植えるかたえに柴犬は目に涙ため見つめいたりき

京都府舞鶴市 新谷 洋子

庭仕事をする作者をかつて飼い犬はじつと見つめていた。黒目がちに潤む瞳を「目に涙た  
め」と言うことで、愛らしくもどこか切なさがこみ上げるような犬との思い出が浮かぶ。

秋の陽を遮るものは地球のみ千里浜の海の果てに没りゆく

群馬県高崎市 井田 善啓

日本で唯一、砂浜を車で走ることのできる石川県の千里浜。秋のうつくしい西日が海のお  
もてに反射しながら沈んでゆく。宇宙から俯瞰したような遙かなまなざしが印象的。

最優秀賞 高校生以下の部・題詠「文」

はじまれば別世界なる文化祭まだビスを打つ板に心に

群馬県高崎商科大学附属高等学校 1年 高橋 健太

文化祭がはじまれば浮遊するような非日常の時間となる。身体も心もふわふわとここではない場所へ漂いそうになりながら、ビスを打つことですし冷静に自分を保っている。

最優秀賞 高校生以下の部・自由題

液晶をとおして見てる海の青その海の他の色を知らない

群馬県高崎商科大学附属高等学校 2年 松藤 柚希

液晶の画面でいつも見ている美しい青の色。普通の人ならそれだけで終りだが、作者は違う。この海は他の色を見せる時もあるはずだと。人間の多面性を知っている作者だろう。

優秀賞 高校生以下の部・題詠「文」二首

色褪せぬ恋文そつと読み返す 後悔なんてなかったように

群馬県高崎商科大学附属高等学校 3年 小川 真美

初句の「色褪せぬ」がまずいい。恋心は変わらずつと続いているのだ。恋愛はうまくいかなかったのか。それでも「後悔」はないか、いやある。「なかったように」が絶妙の表現。

ローファーで春に残りし文を踏む雪は優しい嘘のかたまり

群馬県高崎商科大学附属高等学校 2年 新井 愛海

誰からのどんな手紙だったのだろう。季節が過ぎて春になっても、いつまでも残る雪と手紙のなかのやさしい嘘。ローファーの足の仕草には、寂しくも賢い若さが宿る。

優秀賞 高校生以下の部・自由題 二首

## 昼過ぎの重たい瞼と時計の針ふいに浮かんだメロスの激怒

群馬県太田市立宝泉中学校 3年 塩田 あまね

教室では『走れメロス』の授業が進む。瞼も時計の針も、教室全体がぼんやりと平和な眠気に包まれるなか、友のために命をかけるメロスの激怒が場違いに眩しく燃えている。

## いつも言うあいさつおれいありがとう心がきれい完璧な人

群馬県立利根実業高等学校 1年 星野 るりい

あいさつすると、あいさつを気持ちよく返してくれる人。折りあることにありがとうと言ってくれる人。「心がきれい完璧な人」と相手をたたえる作者も、心のきれいな人だ。



選者賞・伊藤一彦選 高校生以下の部・題詠「文」二首

いにしえの恋する乙女の文たちは今も響くぞ乙女心に

群馬県立利根実業高等学校 1年 工藤 翠優

「いにしえの恋する乙女の文」が具体的に何の日記や文章あるいは和歌を指してるのかはわからないが、作品としては十分通用する。下の句はいにしえの乙女に負けていない。

「いいコンビ」コメントに書かれるその文字が私にとっての地雷原

群馬県立利根実業高等学校 1年 横坂 優妃

コメントを書いたのは先生だろうか。「地雷原」という思いきった表現が印象に残る。「いいコンビ」というのは傍目にはいいが、実は危うさをはらんでいることを知る作者だ。

選者賞・伊藤一彦選 高校生以下の部・自由題 二首

クラスのねふしぎちゃんがねいるんだよでもわたしもねふしぎちゃんだよ

長野県塩尻市立塩尻東小学校 5年 まつざわ ゆあ

「ふしぎちゃん」の言葉が新鮮でおもしろい。他に言いようがない「ふしぎちゃん」なのだ。

そして、この歌がすごいのは下の句。自分も「ふしぎちゃん」だと。おみごと！

スカイツリー見あげて思う人はなぜ高さを競う次はどこだ

群馬県みなかみ町立みなかみ中学校 2年 長島 笑来

スカイツリーを感心して見上げつつ、作者は鋭い疑問をもつ。「なぜ高さを競う」のかと。

東京タワーをこえたスカイツリーの高さをこえる「次」を人は造るのだろうか。

選者賞・小島なお選 高校生以下の部・題詠「文」二首

## 文末に何かがないとマイナス2点行きたいのかもその先の道

群馬県太田市立宝泉中学校 3年 大関 駿

文末には句点「。」を付けて、一文を終わらせる。付け忘れた句点でテストでは減点され  
たけれど、本当は文も、もしかしたら自分のこれからも、まだ終わらせたくないのかも。

## 目を落とし文字を追いかけてゆるとペラリとめくる昼の催花雨

群馬県立利根実業高等学校 1年 本多 心乃美

春、花々の開花をうながすように降る催花雨。雨の日の教室で文字を目で追いながら本を  
読んでいる。ページをめくるその一瞬が、重なりながらゆるやかに春は深まってゆく。

選者賞・小島なお選 高校生以下の部・自由題 二首

## 坂の上金木犀が秋桜に囲まれたからもう届かない

群馬県立利根実業高等学校 3年 生方 綾華

坂をのぼった先に立つ金木犀。秋の深まりとともに咲きはじめたコスモスがぐるりと木を  
囲んでしまった。「もう届かない」のは木であり、心のなかにある何かのことももある。

## 桜散る校庭にぽつんと君がいたこれ見れるのも最期なのかな

群馬県太田市立宝泉中学校 2年 小島 玲奈

校庭に佇む君の姿を、たぶんこれまでに何度も見かけていた。卒業の桜も散って、校庭も  
君も視界から消えてしまう。「なのかな」のつぶやく呼吸がいつまでも聞こえている。

一般の部【題詠「文」】作品集

191人 428首

投稿順に掲載

太字作品は入賞・入選

親の目を逃れし文の褪せたるを燃やすひととき昭和の過ぎる

群馬県みなかみ町 眞庭 義夫

みろり辺にけむり避けつつ文盲の祖母が絵本を語りくれたり

群馬県みなかみ町 眞庭 義夫

村はづれに赤い自転車来るころか畑に文待つ昭和でありき

群馬県みなかみ町 眞庭 義夫

文のみの恋で終るも遠き日の君に届くやひとり詩よむ

群馬県みなかみ町 眞庭 義夫

定形を少し超ゆるか手秤で叔母への文に切手貼り足す

群馬県みなかみ町 眞庭 義夫

かなしみを濾過するごとし雨にぬれ葉書の文字はにじみゆきたり

静岡県浜松市 高田 圭

文脈の中の言葉にタグが付き綿毛のごとく青空を飛ぶ

静岡県浜松市 高田 圭

文恵さん元気ですかと書く手紙しかし続かぬ後の言葉が

長野県箕輪町 市川 光男

若き日の文を読みあげいつまでも変わらぬ愛を約束の妻

三重県亀山市 岩谷 隆司

八十歳文の知らせは亡くなりし友との別れ我が身は次か

三重県亀山市 岩谷 隆司

歌詠みて日々のあれこれ文に書きコロナ禍の世も癒やされ過ごす

千葉県千葉市 うめさわかよこ

「元気かな」問えば「うん」と二文字きて短かく深い中三メール

東京都東村山市 浦壁 あけみ

できるなら山梨文学館で今一度亡母と学びたし肩寄せ合つて

東京都東村山市 浦壁 あけみ

化粧箱に亡母の文が詰まりおり我十八歳の旅立ちのころ

東京都東村山市 浦壁 あけみ

先輩の書類の文字は太かりき豪快に酒呑む漢なりき

奈良県奈良市 堀ノ内 和夫

文才が無きはす無しを孫に言う祖父の恋文祖母得て女房

大阪府大阪市 後藤 憲之

文学部卒も商売やれて居て趣味の康成ストレス癒やす

大阪府大阪市 後藤 憲之

古の文に「夏痩せ鰻食せ」と帰路は匂いをたらふく吸つて

東京都足立区 佐藤 春夫

ていねいな文字をほめれば七日後に残暑見舞も孫よりとどく

群馬県前橋市 松下 昭代

あんとパンみごと合体せしあんパンは東西文化の溶け合ふかたち

群馬県前橋市 松下 昭代

水、料理運びてくるるロボットはまだ注文をとらせてもらへず

群馬県前橋市 松下 昭代

父親と飲めなくなつて寂しいと飾り気のない喪主からの文

愛媛県松山市 宇和上 正

愛息の臓器移植に応じたる両親の文面に感極まれり

愛媛県松山市 宇和上 正

文学館に展示されたる川端へ宛てし大宰の嘆きのあはれ

東京都世田谷区 野上 卓

絵図に置くアンモナイトの文鎮に一億年の時の凝りぬ

東京都世田谷区 野上 卓

空知らぬ夏の雪降る北の文ポプラの綿毛蕎麦にワタスゲ

北海道札幌市 鎌田 誠

スマホ無し時代遅れの文の友届いた葉書夫新益

北海道札幌市 鎌田 誠

時経<sup>た</sup>りて 文降り治盤<sup>ちばん</sup> 芽吹く恩 ただ代<sup>よ</sup>はかりと 過ぎゆ影千代<sup>かげちよ</sup>

群馬県伊勢崎市 御多 衛門

文机に背筋伸ばして本読みし妣の空間に入れざりしよ

茨城県鹿嶋市 児矢野 雅恵

子規虚子に負けんと句作励みけり文名あがらず子と遊ぶなり

茨城県結城市 湯本 康二

文月に野反湖キスゲ咲き終へて指立つ吾が手に蜻蛉とまる

群馬県沼田市 田村 鶴江

一文字 火種の走るナイアガラどよめく中に滝の涼しき

群馬県沼田市 田村 鶴江

段畑に遺跡は広きマチュピチュの旅の文なり自分に宛の

群馬県沼田市 田村 鶴江

百円の文鎮今に変わりたる二ヶ所に筆の置場所ありて

群馬県沼田市 田村 鶴江

癖のある旅先よりの文があり字体なつかし洋間の引出し

群馬県高崎市 齋藤 宏子

辞書を引く知らぬ語ありの文届くフモールはドイツユーモアと知る

群馬県高崎市 齋藤 宏子

眠られぬ夜に握りしボールペン友への文を筆圧強く

群馬県高崎市 齋藤 宏子

息をすることが不思議に苦しくて少しの間文章を記す

群馬県高崎市 齋藤 宏子

文という名を背負いての吾がおり地味な人生つまらぬ一生

群馬県高崎市 齋藤 宏子

雨降れば文机に向かい晴れの日は大笹の梅をまま裏返す

愛知県豊橋市 篠田 武子

美しい文章でなく真実の文字に世を截る松本清張

愛知県豊橋市 篠田 武子

反古にした用紙を再度読み返す文脈はどこから外れしや

愛知県豊橋市 篠田 武子

去年<sup>こぞ</sup>までは朝飯前に文書きぬ主なき座いす静かに暮れる

群馬県沼田市 藤井 佐代子

達筆の古和紙のたば棚のすみ文読み返し知る母の愛

群馬県沼田市 藤井 佐代子

参観日子の作文に母のことペットの亀の後には父も

秋田県大仙市 鈴木 仁

蜻蛉は出されなかつた文のごと水面を滑る翅震わせて

神奈川県相模原市 岩瀬 夏子

望まれて町の名となる紀行文「おったまげた」と黄泉で微笑む

群馬県みなかみ町 番場 正夫

矢立て持ち文をしたたむ旅人の自然尊ぶ鳥詠みし歌

群馬県みなかみ町 番場 正夫

みなかみの自然をままに詠みし歌文に残りて町の名となる

群馬県みなかみ町 番場 正夫

深酒となりたる夜も欠かさずに記したる文で妻を偲びぬ

群馬県みなかみ町 番場 正夫

旅先でこまめに文をしたためつ離れし妻に想い馳せをり

群馬県みなかみ町 番場 正夫

十文とすそから出して払う金今はスマホではい千円ね。

群馬県みなかみ町 倉田 富夫

近況を交した礼を伝えたく心を隠し文をしたたむ

群馬県昭和村 加藤 南風

街灯のルート十七文字見つけあ帰れると巢鴨の路地で

群馬県みなかみ町 本多 寿美枝

はい私今年の文字はこちらです「優」「友」「遊」とゆうゆうとゆう

群馬県みなかみ町 田中 春枝

母からの年に一度のメールにはいつも明るい顔文字がある

群馬県みなかみ町 大山 智也

文男爺元気の元はドクダミ茶畑仕事に勤しむ卒寿

群馬県みなかみ町 宮崎 りえ子

文月に題詠「文」は偶然か 締め切り迫り無い知恵絞る

群馬県みなかみ町 大山 真紀枝

断捨離の手を止め耽る今は昔友より届いた恋物語

群馬県片品村 金子 美由紀

文見ればキュンとなりてえり正すいつときの幸さいあ、ありがとう

群馬県みなかみ町 深代 里子

夏休み駅で見送り京都まで届いた文は鹿児島の印

群馬県みなかみ町 本多 義二

牧水を慕いて歌う日常を三十一文字老いも若きも

群馬県みなかみ町 小林 はつ江

約束は守りますの一文は捨てれず今もひきだしの中

群馬県みなかみ町 篠原 香代

図書館で一目惚れした文読んで目のファインダーに焼き付けていく

群馬県みなかみ町 篠原 忠

久しぶり浴衣の柄は鬼灯で帯は麻の葉恋文結び

群馬県みなかみ町 小室 史

会へずとも父宛の文書きたれば病院暮しの慰めなるか

群馬県みなかみ町 吉田 まゆみ

一言主の神様に文を出し吾子の手術の無事を願ひぬ

群馬県みなかみ町 吉田 まゆみ

歌作る浅知恵なれど舌頭に呪文のごとく転ばしつ詠む

群馬県沼田市 今成 美泉

疎開の友六年生にて帰りゆきいつしら文通途絶えて長し

群馬県昭和村 板橋 きみ江

メールでは伝えきれぬと久々に家の慣わし文にて綴る

宮崎県宮崎市 熱田 民恵

手書きすることも少なくなる世では人差指がかしこく文を

群馬県高崎市 秋山 充利

故郷の地図には「文」の消えたれど同窓会の通知来たりぬ

茨城県東海村 風森 漣翠

縄文にブラキストン線は存在せず遺跡へめぐり彼らと交流

愛知県知立市 星原 風堂

ちよぼ口に文句を言われる引き上げて壺から顔を覗かす蛸に

埼玉県所沢市 若山 巖

これの世の善きこと悪しきこと照らす文月に昇るスーパームーン

岐阜県中津川市 古井 富貴子

亡き父に文書きたれば偲ばれむ棺の中にそつと忍ばす

群馬県みなかみ町 吉田 まゆみ

合格の祝ひのことば指に押すところどころに絵文字を添へて

群馬県前橋市 岡田 正子

みなかみの郵便受けは赤く焼ゆ恋文あまた投函せしか

岐阜県中津川市 吉田 順代



秋空を翔び疲れしか一文字の葉先に止まれる無数のあきつ

岐阜県飛騨市 野村 訓啓

落選が続いてぬますと文を添へ大き筍五本が届く

宮城県仙台市 角田 正雄

馬場が履く十六文が炸裂すリング狭しと靴底煽る

群馬県伊勢崎市 野口 弘

校庭に蟻散らすがに散らばるをさーとまとまり人文字を画く

群馬県伊勢崎市 野口 弘

澄む宙を真つ二つに裂く飛行機の吐く白き息一文字に伸ぶ

群馬県伊勢崎市 野口 弘

蛍火や雪明りとり文をよむそんな昔の物語り解く

群馬県伊勢崎市 野口 弘

文月となりしも聴かぬ蟬しぐれ要らぬ猛暑日勢ひ掛かる

群馬県伊勢崎市 野口 弘

良く見へぬ電話は聞こへぬ言ふ母に大きな文字の手紙を書きぬ

群馬県みなかみ町 奥村 清美

曆には立秋の文字書かれおりまだまだ猛暑真夏日続く

群馬県みなかみ町 奥村 清美

もう買へぬ菓子の袋に残される「はやしや」の文字しばし見つめる

群馬県みなかみ町 奥村 清美

特選に選ばれしこと師に伝ふ文にしたため感謝を綴る

群馬県みなかみ町 奥村 清美

古文書も見続けたなら読めるとの師の言の葉よみがへる秋

群馬県みなかみ町 角村 清美

文字さんメガネをかけてスピーキング今は名古屋かニューヨークか

群馬県みなかみ町 倉田 富夫

あなたへの文はいつもの縦書きにして重力のおまじない足す

群馬県昭和村 加藤 南風

ダイソーでついつい買ってしまうのは練習帳の「美しい文字」

群馬県みなかみ町 本多 寿美枝

コロナ消す呪文のような雨音に目覚めた夜中日の出まで寝る

群馬県みなかみ町 田中 春枝

「文」の記号十年前の地図の中今は静かな校舎佇む

群馬県みなかみ町 大山 智也

痩せるぞと文にしたため早九月きつかった服今はゆるゆる

群馬県みなかみ町 宮崎 りえ子

月末の書類の上にとくったミミズのような文字が数匹

群馬県みなかみ町 大山 真紀枝

送られた荷物の上に畳まれた封筒もない父からの文

群馬県片品村 金子 美由紀

校舎のすき間に香る文の知恵いつでも開く内の財産

群馬県みなかみ町 深代 里子

誕生日息子達から花柄のバックと手紙丁寧な文字で

群馬県みなかみ町 小林 はつ江

「は」と押すと予測でてでくる絵文字たち打っては消して白抜き選ぶ

群馬県みなかみ町 篠原 香代

気遣いや言葉の違うこの世界共存してる文化経済

群馬県みなかみ町 篠原 忠

文束の夢みる波の音をきく海面に眠る蝶をほどこいて

群馬県沼田市 山崎 杜人

新月のまどかな夜の質量という文脈にテンペラを練る

群馬県沼田市 山崎 杜人

先人の悲願の橋の石文を日日の歩みに誦じて読む

東京都青梅市 荒井 千枝

作文のテーマはいつもお母さん三重丸の遠き想ひ出

東京都青梅市 荒井 千枝

文学や 美術全集を 本棚に さりげなく そろえくれし父

群馬県伊勢崎市 新井 恵美子

自作の 漫画と文を 友3人で 交換続けし 境小時代

群馬県伊勢崎市 新井 恵美子

中学の 卒業文集の 代表に 推してくれし 恩師は達者か

群馬県伊勢崎市 新井 恵美子

中学時の ペン文字検定の 合格証 出てきたるタンス しばし懐かしむ

群馬県伊勢崎市 新井 恵美子

高校時 感想文の 県3位 表彰ステージで はにかむ我ありき

群馬県伊勢崎市 新井 恵美子

薬大の 卒業論文の 教室は 和気あいあいと 楽しかりけり

群馬県伊勢崎市 新井 恵美子

かぜひきて 学友からの文は 温かく 「ノート見せるので 早く来てね」と

群馬県伊勢崎市 新井 恵美子

初めての 父からの文は 大学の 我を気づかい 愛あふるるや

群馬県伊勢崎市 新井 恵美子

人づきあい 天才友の 悩みの文 貴女でもかと 安堵したり

群馬県伊勢崎市 新井 恵美子

「きれいで スタイル良くて 好みです」と ハンサム医師の 文に照れいる

群馬県伊勢崎市 新井 恵美子

ブドウ色の ツーピース買いし 都会からの 礼文、出て来し 三十路の情景

群馬県伊勢崎市 新井 恵美子

若き日の 父から母への 恋文は 情熱的で 頬紅らむ

群馬県伊勢崎市 新井 恵美子

我生まれ 父となりたる 父の文は 意欲あふるる 仕事へ熱く

群馬県伊勢崎市 新井 恵美子

娘時の 母の日記の 文読みて ドラマの如く 目に浮かびけり

群馬県伊勢崎市 新井 恵美子

化粧台の 母のメモ帳 そのままに 優しき文字に ちなしの香り

群馬県伊勢崎市 新井 恵美子

短かすぎると父に文句を言ひたれど庭木の伸びる速さ知る今

東京都青梅市 古賀 のり子

退職に寄せ書き貰へば反り合はぬ上司の記した励ましの文

群馬県みどり市 志田 貴志生

文学賞得たりし媪が施設にて人形を抱き老いゆく哀れ

群馬県みなかみ町 小林 博子

松代は吾が郷土にてゆかりの地六文銭ののぼり旗立つ

群馬県みなかみ町 小林 博子

先生と行くバスの旅ゆくりなく五十年前の作文読みたり

群馬県みなかみ町 小林 博子

ああ文月利根の山々緑こく川面に響くラフティングの声

群馬県みなかみ町 高橋 吟子

名作の書き出しの文讀んじた若き日思いその本さがす

群馬県みなかみ町 高橋 吟子

仏壇の奥よりいでし亡き母の財布に残る名前の文字は

群馬県みなかみ町 高橋 吟子

子や孫へ書く文でさへ敬語なり復員兵の闇持つ父は

群馬県沼田市 蛸山 恵子

薄墨で書く訃報文亡き夫の覗いているよ頷いている

千葉県船橋市 川崎 富子

文芸部「くぬぎ」誌出で来わが作品乙女の頃と心根同じ

千葉県船橋市 川崎 富子

あとわずか余命乏しと思えども象形文字の「學」に目覚めつ

京都府舞鶴市 新谷 洋子

綿の花「をかしき匂ひつきためれ」ひとりの部屋に文を読み継ぐ

京都府舞鶴市 新谷 洋子

夏休み丁寧なる文の来て孫と思えず亡夫かと思う

京都府舞鶴市 新谷 洋子

手作りの六文銭を持たせつつ無事の旅路を幾度も祈る

岐阜県飛騨市 江尻 恵子

文章に行き詰まつたらカチャカチャとノックパーツを指で鳴らせり

岡山県和気町 行正 健志

文書くに窓に映せり紅葉葉の艶なる吐息筆の穂に

群馬県みなかみ町 野澤 武

術無きに遥けき彼の日亡き妻の文に印する唇の皺

群馬県みなかみ町 野澤 武

濃く塗れと先生言ふが塗れないの文具減るなば困らす母を

群馬県みなかみ町 野澤 武

陳情に請願文を重ねきて赤根トンネル漸く開通

群馬県高山村 割田 良次

黒塗りの公文書示す役所あり民主の国の自負には合わず

群馬県高山村 割田 良次

身命を賭してつくすと宣誓文農兵に召されし吾は十四歳

群馬県高山村 割田 良次

先立ちし妻の遺せし日記帳吾が恋文が挿まれてあり

群馬県高山村 割田 良次

遺言の文言整へ預託して独り身の終活気楽になりぬ

群馬県高山村 割田 良次

若き日の母に送りし父の文力を込めた「愛」の文字あり

群馬県伊勢崎市 木村 あい子

書きたびに金釘流よと恥らひしも味はい深き亡き母の文字

群馬県伊勢崎市 木村 あい子

妻の座も母の重みもすでに失せて気楽な文字が残生支う

群馬県みなかみ町 手塚 光子

納戸にて古き文箱整理する過ぎ去りしの吾れの青春

群馬県みなかみ町 手塚 光子

新らしき横文字の意味わからずに孫にききおり「テレビ」見ており

群馬県みなかみ町 手塚 光子

子守して育てし孫が初めての感謝の文と「プレゼント」届く

群馬県みなかみ町 手塚 光子

茶の間にて世界の「ニュース」を黙然に文明の世の幸せを知る

群馬県みなかみ町 手塚 光子

理由もなく仏文学にあくがれてカルチエラタンを歩いていたり

大阪府堺市 名川 由江

やすやすと鶏くびる炎帝の別れの文かいわし雲のあり

山口県光市 瀬戸内 光

夏熱し眠れぬ夜に窓を開け老兄案じつ文をしたたむ

香川県丸亀市 寒川 靖子

古里の八十路の友の走り文悪筆なれど了承下され度候なり

群馬県みなかみ町 林 好一

故郷の名もなき山に遊びいて落し文そつとポケに憩う木陰で

群馬県みなかみ町 林 好一

友からの文乱れいて読み進まず八十路の我も悪筆なれども

群馬県みなかみ町 林 好一

師の文を後生大事に仕舞い置き終活の今泣して読む

群馬県みなかみ町 林 好一

老いてなお文化活動励みとしパソコン打ちて余生の日々を

群馬県みなかみ町 林 好一

ただ一度褒められたるは小四の夏の作文今だに暑く

群馬県みなかみ町 眞庭 ヨシ子

小川城趾の文化財なるひとところ清しき平らに秋風渡る

群馬県みなかみ町 眞庭 ヨシ子

悪病のはひり来ぬやう経文を埋めしとふ塚今に拝する

群馬県みなかみ町 眞庭 ヨシ子

くつ箱を開くと見えた封筒の中身の文を読んでドキドキ

群馬県みなかみ町 倉田 富夫

朝礼で気の利く話してみたく何度も文を破棄にして朝

群馬県昭和田 加藤 南風

裏表紙小さく斜めに書いてある「ばあちゃんにおこられたひ」の文字

群馬県みなかみ町 本多 寿美枝

忘れ物取りに帰った幼き日粘土のような文房具箱

群馬県みなかみ町 田中 春枝

夏休み残った宿題感想文「そして」「だから」「ぼくは思いました」

群馬県みなかみ町 大山 智也

外国の友と始めた文通はいつのまにやら音信不通

群馬県みなかみ町 宮崎 りえ子

宿題の作文のため話し合う毎週末のイベント企画

群馬県みなかみ町 大山 真紀枝

宿にある絵葉書元氣？と書き出してパタリと文字が止まる筆不精

群馬県片品村 金子 美由紀

文学の背筋まつすぐわれ思う足もと照らし豊かな知識

群馬県みなかみ町 深代 里子

父急逝に孫代表の弔辞文身体震わせ別れの言葉

群馬県みなかみ町 小林 はつ江

文面が一方通行タイムラグ逢えぬ工夫に友との文通

群馬県みなかみ町 篠原 香代

展開図資料を集め文学者意見を聞いて本を作成

群馬県みなかみ町 篠原 忠

「文箱とは」検索ワードに打ち込んで誘われるは平安朝

群馬県みなかみ町 小室 史

今は過去、過去には現在形をとり、それは正しい文章だった。

群馬県沼田市 山崎 杜人

細やかに白き手うごき文楽の人形阿古屋琴を弾きたり

新潟県新発田市 三浦 ユリコ

文集に元氣なころの友とわれ電車の旅は北へ南へ

新潟県新発田市 三浦 ユリコ

君からの手紙いつしか日本語に拙ない文字に想い溢れて

群馬県みなかみ町 ベネット 昭子

文ちゃんと呼ばれてた母元氣なら白寿でしたと写真に語る

群馬県みなかみ町 ベネット 昭子

十薬の白き花咲く文月に香りも入れて茶葉を作らむ

群馬県みなかみ町 荒木 洋子

受付に書くはずのなき文字を見ゆ夫の書体に似たる記憶に

群馬県みなかみ町 荒木 洋子

養父母に抗ひて乗る若き日の発車間際に父くれし文

群馬県みなかみ町 荒木 洋子

歌碑の建つ千本松原に佇みて 幾山河・・・の文字をなぞりおり

神奈川県座間市 蓮見 孝子

五月晴れの光満ちあふる古文書の「ナマス」訳せし兄は死すとも

神奈川県座間市 蓮見 孝子

恋文のやうにきみへの歌評打つラインのトークに指を震はせ

群馬県高崎市 井田 善啓

「おばあちゃんおたんじょうびおめでとー」つたない文字の幼の手紙

群馬県高崎市 井田 徳子

卒寿すぎ日向ぼっこで本を読む原沢氏の元祖なる文

群馬県みなかみ町 松井 とし子

追伸と暑中見舞に付けたして旅をしたいと文を結べり

群馬県みなかみ町 長浜 利子

半世紀前の沖繩\$切手それを欲しくて文通をせり

群馬県みなかみ町 長浜 利子

戦国の世には主要の山城に六文銭の幟はためく

群馬県みなかみ町 長浜 利子

四度目のワクチン接種の通知きてサラッと文面読みて予約す

群馬県みなかみ町 長浜 利子

文月の夜空を染める揚花火三年ぶりの雨上りの空

群馬県みなかみ町 長浜 利子

字を忘れ言葉出で来ぬ此の頃を敢へて挑みぬ三十一文字に

群馬県みなかみ町 林 恵美子

文字通り時を違へぬ彼岸花まつかに咲きて墓参いざなふ

群馬県みなかみ町 林 恵美子

難聴のわれを気遣ふ妹の手紙の文面いつも朗らか

群馬県みなかみ町 林 恵美子

テレビ視る字幕の送り速ければ倒置法が如文を読みとる

群馬県みなかみ町 林 恵美子

わが町の矢瀬の遺蹟に思ひ馳す縄文人は祖先なるやも

群馬県みなかみ町 林 恵美子

夏休み原稿用紙とにらめっこ名のみですすまぬ感想文

群馬県みなかみ町 三池 幸子

月一度絵筆走らせ文添えて友と交わすや尊き一葉

群馬県みなかみ町 三池 幸子

群青の文字を連ねる文豪の自筆の遺稿セピアに染むる

群馬県みなかみ町 三池 幸子

文中の人になりたしハッピーエンド本を閉じれば憂いふたたび

群馬県みなかみ町 三池 幸子

メール文判じ難きに誤字多く忙しき日々と吾子思いやる

群馬県みなかみ町 三池 幸子

若き日の父より母への文の束母の棺に入れし日のあり

群馬県みなかみ町 細川 のぶ子

在りし日の友の賀状に一行の添え書きの文「長生きしようね」

群馬県みなかみ町 細川 のぶ子

三人で縄文杉の四半周を抱えて吠えた十七歳の夏

愛媛県新居浜市 大賀 康男

家計簿の余白に綴る母が文涙に滲む文字の切なき

大分県国東市 原 比呂子

樽牛言ひし「文は人なり」を座右の銘八十余歳の今も気配る

山形県鶴岡市 大沼 二三枝

落し文拾いつつ青葉文月の林道を友と語り歩みき

群馬県川場村 桑原 謙一

黄葉の散り積もりゆく山道で見上げた空の文色なき果て

三重県津市 樋田 由美

励ましの声を聴かむと亡き師から送られし文また読みかへす

青森県八戸市 木立 徹

悪筆を自慢するがの友のゐて手紙の文字のさても難解

埼玉県さいたま市 前田 明利

推敲を重ねて仰ぐ玻璃の外との斑文様の雲流れゆく

埼玉県さいたま市 前田 明利

流水文纏ひし土器は現し世の光を浴みてあやししく艶めく

埼玉県さいたま市 前田 明利

写真だけ交換したる文通の君は今でも佐渡に住まうや

東京都清瀬市 野原 てい子

折に触れ文を書きたし独り身の昭和三年生まれの友へ

東京都清瀬市 野原 てい子

案じぬし友の文なり難病の癒えぬ痛みの明け暮れのうた

群馬県前橋市 鶴野 敏子

毎日を三十一文字につむぐ時眠気よほひも齢よほひもかなり飛んでる

茨城県笠間市 飯田 初江

百歳を生きたる土屋文明は茂吉以上に食へぬ人なり

東京都杉並区 庭野 治男

捨てる美化なじめぬ吾は昭和びと友よりの文菓子箱に充つ

群馬県みなかみ町 遠藤 長代

会いたいと文運び来る白い鳩速達よりもなお直球で

宮崎県宮崎市 青山 昌子

捨てられぬ文机ふづくえに残るよれくの亡母はの歳時記生活たつき偲なげばる

群馬県みなかみ町 増田 津恵

人伝てにもう五年前に亡くなり焚く決心せり美文の手紙

群馬県みなかみ町 増田 津恵

秋霖や暮れる分校の歌碑永井文確かめて牧水を読む

群馬県みなかみ町 増田 津恵

ひらがな文字作り黄蝶のもつれいる子等賑わいて亡夫も居た庭

群馬県みなかみ町 増田 津恵

父の文「毛筆」切手十五円吾の人生を見詰め続けり

群馬県みなかみ町 澁谷 典子

小三の文子先生くつきりと甘い香りとステキな笑顔

群馬県みなかみ町 澁谷 典子

先駆けの単身赴任五年間文が強める家族の絆

群馬県みなかみ町 澁谷 典子

戦地より家を案ずる父の文今日も見詰る子孫の暮らし

群馬県みなかみ町 澁谷 典子

戦中に生まれし我等高校は何故か盛んに海外文通

群馬県みなかみ町 澁谷 典子

生涯の行く先誓ひし君なりきわが恋心文を送らむ

群馬県みなかみ町 眞庭 アイ子

亡き母の文よみおればわが身辺整えゆきて後の世を生く

群馬県みなかみ町 眞庭 アイ子

夏の色湛へて踊りぬ文月の凌霄花は散りてまだあか澄

群馬県高崎市 湯浅 茂子

嬉しさも悲しさも秘めし手紙文焼き捨てし時煙目にしむ

群馬県みなかみ町 木村 初枝

幾年も逢わぬ友より文届き無事の証を瓦に交せり

群馬県みなかみ町 木村 初枝

手紙文読めば遠き日ありありと走馬燈のごと臉に浮ぶ

群馬県みなかみ町 木村 初枝

四十年振りに会いに来てくれた従姉妹に短き文を送る

徳島県阿南市 坂東 典子

代書屋の箱の中にてそのむかし思い抱きて眠る恋文

鳥取県米子市 生田 麻也子

秋晴れの中で催す文化祭孫と一緒に音を楽しむ

群馬県みなかみ町 倉田 富夫

これからの生き方文に書いてみた果たせるようできないようで

群馬県昭和村 加藤 南風

青信号「下之町」の文字下に五号サイズの白き谷川

群馬県みなかみ町 本多 寿美枝

爽やかな香り漂う文旦の果肉を食べる画像を観てる

群馬県みなかみ町 田中 春枝

汗流し洗車したのにすぐに雨文句は誰に言えばいいのか

群馬県みなかみ町 大山 智也

朝早く目が覚めたのでさつと起き三文の徳なるかと期待

群馬県みなかみ町 宮崎 りえ子

作文という名の付いた宿題をどうにか五行しぼり出し書く

群馬県みなかみ町 大山 真紀枝

掠れてるハガキの文字に若き日の父を思う「ンだ」のカタカナ

群馬県片品村 金子 美由紀

ひだまりに恋文思いさわやかに今も昔も共にそのまま

群馬県みなかみ町 深代 里子

草取りと花とお芝居好きだった父は文句も言わず穏やかに

群馬県みなかみ町 小林 はつ江

例文を調べて真似し書いてみるいつ慣れるのか時候の挨拶

群馬県みなかみ町 篠原 香代

高山の天文台で目が描く星座を渡る星空散歩

群馬県みなかみ町 篠原 忠

つらつらと文字が連なる秋の宵月のかたちの便箋だから？

群馬県みなかみ町 小室 史

文節をとぎれとぎれに繋げあう夏の言葉がみじかくひかる

群馬県沼田市 山崎 杜人

文月はふみひろげづきの略なれば書物に映る淡き月影

群馬県みなかみ町 吉田 まゆみ

文の字を思ひ悩んで作るより自然と浮かぶ歌を好み

群馬県みなかみ町 吉田 まゆみ

神留守の巫女の溜りに読みさしの文庫一冊置かれてありぬ

東京都町田市 谷川 治

母の字と一目でわかる父の名の手紙を添へて文届く

東京都町田市 谷川 治

しわくたに揉みて投げたる文反古拾ひ上げては絵画に匂かく

山口県宇部市 藤井 重行

退職し文三昧の生活を願っていたがいまだ家事多忙

群馬県安中市 福田 誠

子育てに多忙な娘 親の思い文にたくして連絡を待つ

群馬県みなかみ町 島崎 牧蕉

ペンを執り自由と孤独セツトだと文を書き知る我身の軽さ

群馬県みなかみ町 島崎 牧蕉

孫の名の文といふ字を自らの戒名につけ 夫<sup>つま</sup>旅立ちぬ

群馬県みなかみ町 笛木 洋子

読む人の笑ひ誘はむまならぬ手指で記せし拙き書の文

群馬県安中市 新井 八重子

苔桃は雪にひそやか今さらにあなたへ贈る恋文に似て

東京都武蔵野市 北谷 雪

指先でピコピコピコと文字を打ちペン、筆不用の世紀に生きる

群馬県高崎市 猪俣 軍司

書き溜めし家族新聞四十年文の中には子孫の育ち

群馬県みなかみ町 原澤 廣子

文よりも仕事仕事で育ちたる昭和一と桁我百性の娘

群馬県みなかみ町 高橋 やま

友よりは四季折おりに文届く幼馴染みのふたりは九十路

群馬県みなかみ町 高橋 やま

文案を練りて弔辞を認むる長く付き合ふ歌友の訃に

群馬県川場村 林 郁男

兄沖の生簀に育てし大き九絵捌きレシピの文添え持ち来

大阪府岸和田市 向井 靖雄

五十年文通してた友人に紙上短歌で近況知らず

群馬県榛東村 高橋 恵

文化の日久に出会ひし教へ子と握手してより体調好転

群馬県みなかみ町 細川 のぶ子

「ついでこい」殺し文句は儂くて永遠は無いと知っているから

埼玉県春日部市 藤澤 由紀

鉛筆で刺された文字が教科書にどもつてうまく言えなかった箇所

山口県光市 松本 進

くせ文字の名主文書を読みほぐす辞書にいつしか垢つきたり

群馬県前橋市 梅澤 祐一

宿願の八十五歳尾瀬に立つ紀行文記す我が日記帳

群馬県みなかみ町 石坂 作次

戦国の名胡桃城址尋ねたる蘇峰の碑文に夕日落ちゆく

群馬県みなかみ町 石坂 作次

コンクール児童の描きぬ防火の絵啓発の文字太く逞くまし

群馬県みなかみ町 石坂 作次

町誇る青柳画伯の山水画<sup>さんすい</sup>に書かれし雅文に心うたれる

群馬県みなかみ町 石坂 作次

うれしかり長く会はねど筆まめの友はこもごも文寄せくるる

群馬県みなかみ町 中島 早苗

月もなき寂しき小夜に筆とれど友への文は明日に延ばさむ

群馬県みなかみ町 中島 早苗

縄文の埴輪 遙かな時を越え国宝となり文化を語る

群馬県みなかみ町 中島 早苗

風吹けば降るごとく散るもみぢ葉は秋の終りを惜しむ文なり

群馬県みなかみ町 中島 早苗

逝くならば十月中がうれしいと妻の思いを文にのこして

群馬県みなかみ町 小野 朝耶

クワガタの背中を何度描いただろう紙にはじめて「し」の文字は立つ

群馬県渋川市 忽滑谷 三枝子

大手術受けし友より別れの文届かぬ幸せ成功したれば

愛知県岡崎市 西村 愛美



文庫本かばんの中から取り出して君は君だけ君の世界へ

愛知県岡崎市 西村 愛美

ひとり暮らしに慣れたる息子の手料理は手早く文句なしの出来栄え

愛知県岡崎市 西村 愛美

型箱に三十一文字を流し込みはみだす歌は牧水の意気地

香川県三豊市 上久保 忠彦

久びさの友よりの文読み返す息差し聞こゆ一字千金

群馬県高崎市 神澤 静枝

斎場で施設の義父の似顔絵と「感謝」の文字が義母を見送る

群馬県千代田町 大谷 光男

文化の日掃除ロボット初掃除勞せず見守る高齢者かな

群馬県千代田町 大谷 徳湖

小学校恩師の手なる「有り難う」その文なぞる柿採りし後

大阪府豊能町 熊ノ郷 紀子

とほき日の左下がりの祖母の文 曇るめがねの玉を拭きたり

大阪府豊能町 熊ノ郷 紀子

若きらに鍛へられ来て打つメール交はせし文も簡略となる

東京都杉並区 堀井 邦子

何処へもケータイに済む時代いま文も良きかな絵葉書にして

東京都杉並区 堀井 邦子

郷里遠く古りし手紙の束幾つ黄ばみて殊に亡母の文恋ふ

東京都杉並区 堀井 邦子

昔からの溜池なるや調査とふ文書の届き祖父を偲べり

東京都杉並区 堀井 邦子

蓋裏にも細かに青貝貼りつめし文箱に触れる指先想ふ

山口県山陽小野田市山縣 満里子

水河にて凍れるようにフロッピー・ディスクの文字は溶け出さぬまま

群馬県藤岡市 清水 静子

一枚の葉書の裏の児の手形ひまわり色で文の日に着く

佐賀県唐津市 浦田 穂積

名は体を表さずして作文の苦手な妻は偶文字

秋田県秋田市 照井 敬司

若き日の母の習いし書の道は嫁いだ娘に文を書くため

大阪府柏原市 田倉 あけみ

20才までアヤちゃん嫁に来フミさん いつかブンブンうるさ子供ら

群馬県みなかみ町 松浦 覺

穏やかな令和四年の文化の日なお先生の講義聞き居り

群馬県みなかみ町 杉木 輝夫

文化の日たゆまぬ努力果したる秋の叙勲に友の名ありぬ

群馬県みなかみ町 杉木 輝夫

利き腕の怪我に文字さえ書き込めず頼みの綱は妻の代筆

群馬県みなかみ町 杉木 輝夫

天平の聖武天皇文物は正倉院に日本の至宝

群馬県みなかみ町 真庭 唯芳

天明の浅間の噴火大惨事鬼押出は文化的遺産

群馬県みなかみ町 真庭 唯芳

難解な地方文書に取組んで辞典片手にはや夜半の月

群馬県みなかみ町 真庭 唯芳

古文書は読みこなせれば楽しいが夜が更けてなお解読ならず

群馬県みなかみ町 真庭 唯芳

半紙置き文鎮のせて気を入れて筆に墨汁臨書友とする

群馬県みなかみ町 真庭 唯芳

文化祭幼なじみの友とあい椅子をひきよせ話はつきぬ

群馬県みなかみ町 真庭 三枝子

文箱の友の手紙を読み返す青春の日々懐かしきかな

群馬県みなかみ町 原澤 芳雄

喜寿過ぎて懐かしく読む文集の自分の夢はいまだ果せず

群馬県みなかみ町 原澤 芳雄

文化の日城址登り見下ろせば黒煙吐きてSLの行く

群馬県みなかみ町 原澤 芳雄

秋日和古刹巡りて感嘆す文殊菩薩のこうごうしさや

群馬県みなかみ町 原澤 芳雄

終活とふこの二文字に背を押され過去を消すごと物を捨て去る

群馬県みなかみ町 石坂 喜美江

孫からの便りは常にラインなりちさき文字にてルーペをあてる

群馬県みなかみ町 石坂 喜美江

朝露にかがやくもみぢ拾ひくる友への文に彩り添ふる

群馬県みなかみ町 石坂 喜美江

高齢の友の覚悟は子の元へ寂しさ埋まる文通約す

群馬県みなかみ町 西形 きみ江

文章で言いたいことば思考中素直な気持ちになれない我

群馬県みなかみ町 倉田 富夫

週末に会えた娘へ長メール返信文は「じゃあまたばいばい」

群馬県昭和田 加藤 南風

石巻走るバンボデイ背面に「もう泣かない」とご太い文字で

群馬県みなかみ町 本多 寿美枝

カタカナで英語のような文面に納得をしてクラウドサイン

群馬県みなかみ町 田中 春枝

文化の日スタートライン新シューズ四二・一九五キロ

群馬県みなかみ町 大山 智也

文化の日あちこち出向き紙芝居貴重な宝次の世代に

群馬県みなかみ町 宮崎 りえ子

若き頃文通してた友の名が今は偶然娘の名前

群馬県みなかみ町 大山 真紀枝

「ありがとう」本に貼られた丸文字を指でなぞって手帳にはさむ

群馬県片品村 金子 美由紀

大阪の香りいっぱい文届く過去のおもい出どんぶり鉢へ

群馬県みなかみ町 深代 里子

娘から一目でわかる絵文字一つ長文要らず感心する

群馬県みなかみ町 小林 はつ江

突き放す「頑張つて」より「頑張ろう」寄り添うような呪文のことば

群馬県みなかみ町 篠原 香代

秋浅し文句を言うが別れ道話し満たされ風になびいた

群馬県みなかみ町 篠原 忠

文豪は恋多きものエトセトラ今日は23ふみの日恋文書こうか

群馬県みなかみ町 小室 史

朝の窓のくもりを鏡文字で消す鏡のなかを降りてゆく雪

群馬県沼田市 山崎 杜人

「これ、なあに」縄文土器のカケラかもあのと埋めた風呂場のレンガ

群馬県みなかみ町 本多 義二

文机蚕の中を持ち歩き半紙を置いて一人寺子屋

群馬県みなかみ町 本多 義二

遣隋使「小野妹子」は海わたり肩から重い文をわたしぬ

群馬県みなかみ町 本多 義二

横道の途中であった古書店で文庫の中の値段の鉛筆値段

群馬県みなかみ町 本多 義二

夏草を刈り始めてる城跡に六文銭が風に靡いて

群馬県みなかみ町 本多 義二

西日さす文豪Bの棚の前そろいの制服図書室の席

群馬県みなかみ町 原澤 君子

落し文拾えば吉祥手の中にゆだねて妣の想いたしかむ

群馬県みなかみ町 久野 とし子

妣に文書きてひと日を恙がなく導かれつつ七十五歳

群馬県みなかみ町 久野 とし子

この文の届くころには吾友の病はいえていと祈りし

群馬県みなかみ町 久野 とし子

境内に落ちる落葉のパラパラと風に銀杏うながされつつ

群馬県みなかみ町 久野 とし子

胡桃の樹利根の河原の早瀬にも薄黄に丸く実のコロコロと

群馬県みなかみ町 久野 とし子

万葉の碑文を残す徒渡り利根の流れを今に残せり

群馬県みなかみ町 大川 美知子

嫁ぎ来て終活近き押し入れに青春の文桐箱の中

群馬県みなかみ町 大川 美知子

タゴールやロシア文学探す秋棚の奥にて埃りを被る

群馬県みなかみ町 大川 美知子

文豪の足跡多き我が町は紅葉に埋もれ歌の輝き

群馬県みなかみ町 諸 田 弘

学舎まなびやで武を練り文に勤しめる遠い想い出七転八起しちてんはつつき

群馬県三芳町 高橋 残光

宗茂公に興味もつ子の小三と古文書館の扉をとくに押す

福岡県大牟田市 西山 博幸

ぎふ文来しづかに言ひき「ちゃんとした大人を立てて出直して来い」

福岡県大牟田市 西山 博幸

いつ誰が書き損じたる文なるや「ようこそ」のみの便箋の落つ

愛知県岡崎市 中村 佐世子

卓上の依頼原稿に文綴る指に及びて冬日影なす

愛知県岡崎市 中村 佐世子

文芸部の石崎先生美人なりそわそわ入りぬ男子の四人

愛知県岡崎市 中村 佐世子

ひとつずつ文字を確かめ写経せり意味の深さは解きがたけれど

愛知県岡崎市 中村 佐世子

訪れる人なし文なしアツケラポン心乾きて一日終りぬ

愛知県岡崎市 中村 佐世子

宝くじ当たれば我にすそ分けと「文」ふみ叔母さんの言葉懐かし

神奈川県横浜市 高山 克子

文鳥の逃げし瞬間声あげて大空に消ゆ自由となりて

神奈川県横浜市 高山 克子

ルーペ出しバラの漢字の文字写す月日のたてば又同じ事

神奈川県横浜市 高山 克子

若き日に情熱そそぎし文法のいま役立ちぬ老いの短歌に

群馬県高崎市 石井 省三

休日ひにショートショートショの文庫ふせカフェラテするふわふわハート

広島県広島市 小野 系子

秋の夕作文チェックの十人目磨きたくなる欠片に出会ふ

群馬県渋川市 木暮 由利子

看板の文字ひとつずつを声にだす卒寿の母の散歩は遅々と

秋田県秋田市 加藤 隆枝

一行の文にふはりと解かれてふみに気づきぬ天高きこと

秋田県秋田市 篠田 和香子

コロナ禍もウクライナの戦いも知らずに逝きし亡夫に文書く

京都府福知山市 阪根 まさの

携帯のただ一文の走り書き言わんとは解く兄弟なれば

宮崎県日向市 黒木 栄一

七十歳を前にし文化協会の文芸部なぞに所属しており

岐阜県飛騨市 横山 美保子

書展にて蜘蛛の糸の名文を心ひかれて読むは楽しき

群馬県太田市 白石 政江

我自身文学と歴史大好きなりいつまでも両者の絆強し

大阪府大阪市 水上之川

高校の読解問題不十分我文章熟読せず

大阪府大阪市 水上之川

高校の文章問題登場す読むと書く訓練で強化

大阪府大阪市 水上之川

我自身文章書き大好きなり小説だけで生きる厳しい

大阪府大阪市 水上之川

我自身文章読み苦にならず大好きな本手放す事なし

大阪府大阪市 水上之川

水源の森にオヤジは居るといふ弟の文地方紙に載る

千葉県市川市 松田 恵子

好きだったコロンの香まだあるような文箱にスナック「まゆみ」のマッチ

北海道札幌市 後藤 明美

常識が崩れた時の辻褄を合わす台詞の「文化の違い」

群馬県高崎市 大塚 とみこ

父がいて何でも出てきた文机は主を失い魔力は消えた

群馬県高崎市 大塚 とみこ

趣味として今後はやっていくよって君が綴じた最後の論文

茨城県結城市 ハリ お

吾に歌を文子おばちゃんと文通し短歌の道を亡きし今でも

群馬県高崎市 湯浅 慧子

一筆に笑顔が連なる家族あり斜めに寄せ合いHappyの文字

東京都中央区 佐藤 直大

甲子園ピンチの投手は囲まれる台風・警報・避難の文字らに

東京都中央区 佐藤 直大

文庫本リュックにしのばす山男の今宵はきつと星の糸降る

神奈川県藤沢市 近藤 千壽

ときめきて書きし恋文読み返す幾星霜にメール読めるや

群馬県沼田市 高倉 嶸風

作文も凶画も刺繍もまねしてた妹が吾の心の師匠

群馬県高崎市 松本 由美子

助手席の白梅一枝結びたる父から君への文も香らす

群馬県高崎市 佐藤 真理子

文鳥のうすもも色のくちばしの青菜つつけば朝露の散る

愛知県名古屋市中区 清水 良郎

出稼で油染み手で買い求む文豪啄木「一握の砂」

長野県飯綱町 井澤 栄一

十六文キックを知らぬ子どもらが指先で操る戦闘ゲーム

群馬県前橋市 中澤 ひろみ

五十年前の荷物に入ってた「母ちゃんより」の文捨てずあり

群馬県前橋市 中澤 ひろみ

のり弁公文書のニユースを食らい向かう非正規ブラック派遣

大阪府羽曳野市 凛 七星

吾の花壇いつも横切る文色なき野良猫どもよ友になれぬか

大阪府羽曳野市 凛 七星

栗の木を植えて育てて実を採りし縄文人は秋の山びと

滋賀県大津市 船岡 房公

覚束なき文字に記せし百歳の亡母の歌あり形見ひとつの

神奈川県愛川町 福田 茂子

文殊堂に何を願いしか横書きのアラビア文字の絵馬のひとつは

神奈川県愛川町 福田 茂子

筆まめな友は年ごと手書きにてはみ出しさうな「千支」の一文字

岡山県倉敷市 三宅 照司

十六の古文の授業ときめきは「東下り」で最高潮に

岡山県瀬戸内市 小橋 辰矢

辛うじて二、三文書しか読み解けねど古文書に見付く高祖父の名を

石川県金沢市 橋本 枝折

歌会の詠草つぎつぎ届きたり迷ひの滲むそれぞれの文字

石川県金沢市 橋本 枝折

唯一の祖母の便りは黄ばみおり鉛筆書きの震える文字で

大阪府河内長野市 木村 嘉子

「近いうちに来てくれないか」母病むと言えない父の文が届きぬ

秋田県秋田市 蓬田 真弓

わたくしの言葉の森のひだまりに村岡花子の訳文の棲む

秋田県秋田市 蓬田 真弓

ちゃんとした恋文書きし青春をもっていること 誇らしくあり

秋田県秋田市 蓬田 真弓

「お疲れさま、先に休むね」残業の弟へ宛てた母からの文

秋田県秋田市 蓬田 真弓

おぼつかなき賀状の文字は父からの最後の手紙 なぞりつつ読む

秋田県秋田市 蓬田 真弓

舅姑様 ぢゅうははさま 忠さんにもよろしくと鉛筆書きの母の文いつも

京都府舞鶴市 鯨本 ミツ子

五十年文通せし友の賀状無く君の安否を気遣ふ毎日

群馬県沼田市 今井 栄一

千年を繋いで生きたこの文字を味わうようにページを開く

群馬県沼田市 桑原 環世

天文学学びつつ見る星空は神話を拵げたような清しき すが

群馬県沼田市 桑原 環世

晩秋の久しき文に心ゆき卒寿の彼女便箋五枚

群馬県中之条町 島村 暁星

伝えたきなにもなければ娘への文にしたたむ初雪のこと

秋田県秋田市 高村 正広

秋たけて渋柿と文とどきたり米寿の色を軒に吊せり

群馬県前橋市 山口 タツ子

左目は見えぬと美しき文とどく卒寿の友はあれこれ書いて

群馬県前橋市 山口 タツ子

宝川のもみじは盛りと文とどく開けばはらりと紅葉の落つる

群馬県前橋市 山口 タツ子

震え字の母の代わりに文字を書きじつと見つめて思わず笑う

群馬県みなかみ町 小林 和子

お寺にて皆で集まり本を読む書かれし文字の意味も分ならず

群馬県みなかみ町 小林 和子

文を読む耳をすませばラジオから聞えてくるよ姉さんの声

群馬県沼田市 一 花

森の中花に集まる蜂さんが文文文とはちみつ作り

群馬県沼田市 一 花

窓越しに「石焼き芋」と声がする文字文字文字と買えない私

群馬県沼田市 一 花

文を書くよわい私が短歌の課題毎年くるよ姉のお誘い

群馬県沼田市 一 花

恋文で知り合う二人最愛と幸の道のり歩んで行こう

群馬県沼田市 一 花

秋風に落ち葉散り逝く遠い空衣文を抜いてあなたを送る

群馬県みなかみ町 夏 花

筆と墨写経の文字が擦れてる香り漂いあなたを悼む

群馬県みなかみ町 夏 花

断捨離で引き出し奥に文庫本ページ捲れば淡く儂い

群馬県みなかみ町 夏 花

仕事中ほっこりさせる文房具テンション上げて今日も頑張る

群馬県みなかみ町 夏 花

母が逝きあなたにくれた文面は優しく包み心救われ

群馬県みなかみ町 夏 花

くちびるを真一文字に引き結び何を思うぞ稲穂見つめて

群馬県みなかみ町 小室 史

一般の部【自由題】

作品集

197人 482首  
投稿順に掲  
太字作品は入賞・入選

まぼろしに立つ影ならば消えずぬよ父が畑打つ母が菜を摘む

群馬県みなかみ町 眞庭 義夫

越後より山を越し来し瞽女の身をあろりに語る祖母のいまなし

群馬県みなかみ町 眞庭 義夫

魔の山とその岩壁を呼ばれつも谷川岳の残照赤し

群馬県みなかみ町 眞庭 義夫

むささびが人なき社に棲みつきて木花之開耶姫と遊べり

群馬県みなかみ町 眞庭 義夫

病みて見る窓に流るる白き雲尾瀬に向かひてゆつたりとゆく

群馬県みなかみ町 眞庭 義夫

青空にタグをつければあかねさす安田講堂ぼんやりと立つ

静岡県浜松市 高田 圭

暗がりに置きわすれてた腕時計夏の陽射しをたらふくおたべ

静岡県浜松市 高田 圭

ふわふわの氷にシロップかけられて開田高原青空の中

長野県箕輪町 市川 光男

一輪の山百合の花月光の光を浴びて見返り美人

三重県亀山市 岩谷 隆司

淋しさは捨て去るほどにまとわりて老いたる旅の淋しさは友

三重県亀山市 岩谷 隆司

土に帰す生まれし命悔やまずに命の限り吾生きてゆく

千葉県千葉市 うめさわ かよこ

じゃがいもに三日月形の傷ありて弟の汗の収穫とどく

東京都東村山市 浦壁 あけみ

「振りむいて」我を呼ぶがに香りくる天女のごときみかんの花は

東京都東村山市 浦壁 あけみ

開拓に汗せし亡義父のバイオリン聞きに行きたしタイムスリップして

東京都東村山市 浦壁 あけみ

森深き沢の清水を掬ひ飲めば高峰の雪の香り立ちけり

奈良県奈良市 堀ノ内 和夫

難便に神の一滴功奏し老いを忘れて目にひと滴

大阪府大阪市 後藤 憲之

趣味だから男のロマン判るけど女は不満利己主義満ちて

大阪府大阪市 後藤 憲之

三振にゴロにフライの大谷のテレビかじりのファンのため息

東京都足立区 佐藤 春夫

言へざりし終の一言<sup>ひと</sup>けふ夫に「あなたは私のこの世の一人」

群馬県前橋市 松下 昭代

ひとりみて中島みゆきの「糸」聞けば会ふべき人に会へし幸思ふ

群馬県前橋市 松下 昭代

ちやうどいい湯かげんですよお父さん 風呂とビールに目がなかつたね

群馬県前橋市 松下 昭代

じわじわとチェーンストア侵食し過疎のかそけき灯の細りゆく

愛媛県松山市 宇和上 正

故郷の三坂峠にまつぐの滑走路のごとき片側三車線

愛媛県松山市 宇和上 正

特攻に戦死をしたる子のことは語らざるままその父は逝く

東京都世田谷区 野上 卓

万発の核ミサイルはこの世界三たび滅ぼしなほ余るべし

東京都世田谷区 野上 卓

運河沿いイエスタデイに揺れながら下手な短歌詠み六十三円

北海道札幌市 鎌田 誠



孫からの漢字少ない励ましの似顔絵壁に透析の朝

北海道札幌市 鎌田 誠

声おもて わずらうってわかる いたみトキ 我がはい輩やから 生きるあかしよ

群馬県伊勢崎市 御多衛門

今日の日の良きことひとつ取り寄せのパンを土産に娘訪ひ来る

茨城県鹿嶋市 児矢野 雅恵

居住まひをととのへ稲の稔りけり玉虫そばで死んでゐるなり

茨城県結城市 湯本 康二

曇る日を地上すれすれ飛ぶ燕今日は青空高みをとべる

群馬県沼田市 田村 鶴江

「ホーホケキョ」今年も盆に時終ときへてスマホに秋の声を聞きをり

群馬県沼田市 田村 鶴江

久久に夫の研ぎたる包丁の涙さそわぬ今朝の玉葱

群馬県沼田市 田村 鶴江

撫でたればクルリと首を回したる頭ふかふかカフェのふくろふ

群馬県沼田市 田村 鶴江

白鷺の三羽高みに飛ぶ夕べ明日はきつと雨となるかと

群馬県高崎市 齋藤 宏子

朝あるや午後にはあるや老二人待ち続けている初孫の声

群馬県高崎市 齋藤 宏子

新じゃがのサラダ作りて思い出す日本死ねのヤンママの声

群馬県高崎市 齋藤 宏子

リズムカルに階段下りる末娘嫁がずもがな一首作れり

群馬県高崎市 齋藤 宏子

足乳根を解く和歌集の帯の名に大学時代の恩師見付ける

群馬県高崎市 齋藤 宏子

オニヤンマの虎模様に弱いスズメバチ山の帽子にクラブト飾る

愛知県豊橋市 篠田 武子

執務室の机に核ボタンの鞆乗せ時々触るロシアの元首

愛知県豊橋市 篠田 武子

スツキリとはつきりしない天気予報黙つて朝刊畳まれてゆく

愛知県豊橋市 篠田 武子

特養のベッドの脇に車椅子力をこめてしわむ手のばす

群馬県沼田市 藤井 佐代子

特養の部屋にぼつんと和歌の本はや一世紀脳の血しこる

群馬県沼田市 藤井 佐代子

逢いたしと書いてしまった追伸に修正液がべつとり乾く

徳島県阿南市 小畑 定弘

あなたには負けたくないと言う風に老人ばかりの句会は激す

徳島県阿南市 小畑 定弘

用のみの封筒渡して帰りゆく老いの思いを微塵に砕き

徳島県阿南市 小畑 定弘

世の中に弾き出された老人が屯たむろしている喫煙広場

徳島県阿南市 小畑 定弘

山の湯へ舞いきし紅葉手に掬う少女の声にひびく青空

秋田県大仙市 鈴木 仁

きみがいた街をゆるりと通り過ぐ通勤快速吾を揺らす夕

神奈川県相模原市 岩瀬 夏子

一ノ倉眼下に見えし谷川の宿に足止め詠う旅人

群馬県みなかみ町 番場 正夫

我が町の名前となりし「みなかみ」はエコパークなる夢を育てり

群馬県みなかみ町 番場 正夫

日輪を背に受け急ぐ峡路旅草鞋でつたう谷川の石

群馬県みなかみ町 番場 正夫

越後瞽女通いし吹路の坂道を顕彰歩き蛭に喰わるる

群馬県みなかみ町 番場 正夫

一滴が源となり生む大河坂太郎今日も渦巻く

群馬県みなかみ町 番場 正夫

キラキラと凍てつく窓に陽があたるながれる露に春の訪れ

群馬県みなかみ町 倉田 富夫

外に出てなにかしたらのお説教くしやみに変えるスギ花粉症

群馬県昭和村 加藤 南風

福寿草芽を出す頃に頬なでて春はもうすぐと告げる風が好き

群馬県みなかみ町 本多 寿美枝

また今年梅か桃かは聞けないが隣の庭にピンクのしだれ

群馬県みなかみ町 田中 春枝

背中にはまだ大きめのランドセル黄色い帽子かぶって走る

群馬県みなかみ町 大山 智也

雪消えて一面に咲くいぬふぐり青い絨毯敷き詰めたみたい

群馬県みなかみ町 宮崎 りえ子

ふきのとう出そうで出ない早く出る夢の中ではおやき食べてる

群馬県みなかみ町 大山 真紀枝

春よ来いどこかで春が流れると振り向くうちの愛犬はハル

群馬県片品村 金子 美由紀

毎日を急ぎ急がず言い聞かせ欲にからんでふつとうするも

群馬県みなかみ町 深代 里子

ゴミ袋両手にさげて立ち止まり小枝に梅のほころびをみる

群馬県みなかみ町 本多 義二

満開の桜と椿風に揺れ美しくあり遅しくある

群馬県みなかみ町 小林 はつ江

海わたり宙返りして燕くる春の雁らは北へと帰る

群馬県みなかみ町 篠原 香代

タンポポの綿乗り風切り舵を取り山岳越えて命の泉

群馬県みなかみ町 篠原 忠

人間てめんどうくさいなでもだから生きてゆくのか朧月

群馬県みなかみ町 小室 史

意識なく酸素吸入する父の手の平はつかに汗ばんでをり

群馬県みなかみ町 吉田 まゆみ

夫と吾ランプに集むる蛾のごとく無言で見つむるオペ室のランプ

群馬県みなかみ町 吉田 まゆみ

旅と酒名を馳す歌人訪い呉れし百年経るも顕彰はなお

群馬県沼田市 今成 美泉

はい終りッベテラン看護師語尾あげて針抜きし腕ぼんと打ち笑む

群馬県昭和村 板橋 きみ江

元首相身罷られたと聞く夕辺満月なれど光さびしき

宮崎県宮崎市 熱田 民恵

空高く子つばめ連れて旋回し群れて旅立つ燕はいいな

群馬県高崎市 秋山 充利

やはらかな重みと温み膝に乗るこの微睡みを得たる幸せ

茨城県東海村 風森 漣翠

荻野屋の峠の釜めしなつかしみ山のいで湯へ行きたかりける

愛知県知立市 星原 風堂

約束を果たし得ぬまま転出し蜂の子とりもうやむやとなる

埼玉県所沢市 若山 巖

馬籠路の緑ゆたかな峠より見る畦道に青田かぜ吹く

岐阜県中津川市 古井 富貴子

遺影の父に声かけて朝のごみ出しさくさく歩む

岐阜県みなかみ町 吉田 まゆみ

赤城嶺より空つ風おりくるわが麓老いてこの地に住むべくなりぬ

群馬県前橋市 岡田 正子

丸き種 大粒 小粒 時に刺す 花もいろいろ種もいろいろ

岐阜県中津川市 吉田 順代

夏の夜のふと目覚めたるしまらくは身を空想の世界に遊ぶ

岐阜県飛騨市 野村 訓啓

富岡の世界遺産の報道をじつと見詰めて母は語らず

宮城県仙台市 角田 正雄

難聴となりしが故に寄り添へる言葉巧みに耳朶くすぐる

群馬県伊勢崎市 野口 弘

こほろぎの啼く季となりぬ草叢は俄然騒立つ虫集く宵

群馬県伊勢崎市 野口 弘

夕されば秋風かよふ庭にたちししみじみ耽るひと日の趣

群馬県伊勢崎市 野口 弘

蟬しぐれ聴かば聴こへる暮れ泥む茜の空を頻りとふるはず

群馬県伊勢崎市 野口 弘

補聴器を着けらばつけたで騒がしく憂き世の雑多津波の如し

群馬県伊勢崎市 野口 弘

幹伸ばし役を終えたる桐一と葉しずかに落ちて人生を知る

群馬県みなかみ町 林 いくじ

鉄塔に掛り沈まぬ夏至の日の夕陽は遠し農具を洗う

群馬県みなかみ町 林 いくじ

山眠る吹雪の夜はぬくぬくと猫となかよく至福の炬燵

群馬県みなかみ町 林 いくじ

山寺の月見の会の月を呼ぶ誰の横笛闇を震はす

群馬県みなかみ町 林 いくじ

桑畑の夜明けは早し桑を切る声が聞こえる道をへだてて

群馬県みなかみ町 林 いくじ

夕暮れも日毎早まり秋風に窓辺漂ふ夕げの匂ひ

群馬県みなかみ町 奥村 清美

連日の熊の目撃メールあり近所歩くも鈴鳴らし行く

群馬県みなかみ町 奥村 清美

宅配に頼りてあまり訪はぬ閉店なれば後悔残る

群馬県みなかみ町 奥村 清美

訃報にて故人を偲びおとなへば畑に一面そばの花白し

群馬県みなかみ町 奥村 清美

久しぶり山道行かば蟬の鳴く夏の名残りとしばし聞き入る

群馬県みなかみ町 奥村 清美

メロディを光にのせて送り出す受け取る友の笑顔の写真

群馬県みなかみ町 倉田 富夫

忙しく翳る気力と前向きさ奮い立たせる言葉の光

群馬県昭和村 加藤 南風

ちらほらと散りゆく桜の花びらはサーチライトの光りに浮かぶ

群馬県みなかみ町 本多 寿美枝

世界へと平和の祈り届けますピンクムーンの光に乗せて

群馬県みなかみ町 田中 春枝

たまにはさ言いたいことをぶちまけて謝ること光の如く

群馬県みなかみ町 大山 智也

花桃の白とピンクの花びらに光が当たり心と和ます

群馬県みなかみ町 宮崎 りえ子

太陽の光眩しくブラインド下げることから仕事始まる

群馬県みなかみ町 大山 真紀枝

車降り重い鞆とため息を包む光の朧月夜

群馬県片品村 金子 美由紀

古民家のひかりさしこむぬくもりにみんな楽しむ日本の歴史

群馬県みなかみ町 深代 里子

幾たびも仲間と共に楽しめたハワイ観光今は難しい

群馬県みなかみ町 小林 はつ江

もれてくる光を全部遮って深夜のベッドのクリープハイプ

群馬県みなかみ町 篠原 香代

一、五自信ある目に目薬をスマホの光目がぼやけてく

群馬県みなかみ町 篠原 忠

反照する息あたたかく月面は冬の幾何学模様と思う

群馬県沼田市 山崎 杜人

瞳からレンズを外す ゆびさきに地球平面説をゆだねて

群馬県沼田市 山崎 杜人

ポツタリと落ちてきそうな夕月を掌に受けとめて持ち帰りたいし

東京都青梅市 荒井 千枝

今年また種を蒔かむか山百合に花粉をつける蝶に代りて

東京都青梅市 荒井 千枝

従姉達を 花と色彩で 人柄と 姿・職を 詠んでみたり

群馬県伊勢崎市 新井 恵美子

従姉Yは 白ボタンの如く おとなしく 早世したる 和裁士なり

群馬県伊勢崎市 新井 恵美子

従姉Kは 気位高く 美人で 胡蝶蘭に似し バイヤーなり

群馬県伊勢崎市 新井 恵美子

従姉Yは 和風美人で おおらかで 白百合の如き 洋品店員

群馬県伊勢崎市 新井 恵美子

従姉Mは ひまわりの如く 社交的 時折、刺さず 銀行課長

群馬県伊勢崎市 新井 恵美子

従姉Mは 水中花なり セクシーで ミステリアスな 銀行員

群馬県伊勢崎市 新井 恵美子

従姉Tは 桃色の コスモスに似し 可憐で温和な 保育士なり

群馬県伊勢崎市 新井 恵美子

従姉Yは 真白き水仙 気立て良く 美人薄命の 保育士なりき

群馬県伊勢崎市 新井 恵美子

従姉Tは モデルバイトもし 派手顔で 赤きダリアの 輝きなり

群馬県伊勢崎市 新井 恵美子

末従姉妹の我は 藤色の かすみ草に似し 感性豊かな 薬剤師なり

群馬県伊勢崎市 新井 恵美子

伯母Aは 牡丹の如く ほがらかで 歌い踊りし 会社役員

群馬県伊勢崎市 新井 恵美子

伯母Nは 我、誕生前に 早世し 白菊の如く 優しきと聞く

群馬県伊勢崎市 新井 恵美子

伯母Mは 寒椿の如く 芯強く 雪国に生きし 外務員なり

群馬県伊勢崎市 新井 恵美子

伯母Mは 宝塚の 華やぎで バラの如き 洋裁師なり

群馬県伊勢崎市 新井 恵美子

我が母Rの 白衣姿は 品に満ち 心優しき くちなしの花

群馬県伊勢崎市 新井 恵美子

- シャッター街をサンバのステップ過ぎ行きて冬の日差しのいくらか温し  
 東京都青梅市 古賀 のり子
- 御仏の慈顔に心満たされて大和路歩みし職辞し秋に  
 群馬県みどり市 志田 貴志生
- 微塵切り千切り乱切り刻みゆくメニューに合はず包丁捌き  
 群馬県みなかみ町 小林 博子
- 幼日にトツカン花と教へたる亡父の好みし蚩袋は  
 群馬県みなかみ町 小林 博子
- 牧水の越え来し道は何処かと暮坂峠へ地図を頼りに  
 群馬県みなかみ町 小林 博子
- 馬鈴薯を掘りつつ畑に屈むとき蝉の鳴く声雨のごと降る  
 群馬県みなかみ町 小林 博子
- 柔らかき初秋の光りに照らされて秋海棠は淡きくれなゐ  
 群馬県みなかみ町 小林 博子
- 猛暑にもめげず揺れつつ枝先にとめどなく咲く凌霄花  
 群馬県みなかみ町 小林 博子
- 傷の有無粒の大小選り分けて梅酒シロップ梅干となす  
 群馬県みなかみ町 高橋 吟子
- 手の平で少しづれてる賽の目に豆腐ゆつくりみそ汁におとす  
 群馬県みなかみ町 高橋 吟子
- 牧水も歩みしというこの山路今も変わらず野あざみの咲く  
 群馬県みなかみ町 高橋 吟子
- 親しみて牧水の歌つぶやけばやがて夢にて遭へる気にして  
 群馬県沼田市 蠟山 恵子
- 郁子二つ土産に一首書き留む亡き夫植えし柵に実ると  
 千葉県船橋市 川崎 富子
- 高三に発行されし「くぬぎ」誌を老いたる友と読み進むなり  
 千葉県船橋市 川崎 富子
- 球根を植えるかたえに柴犬は目に涙ため見つめいたりき  
 京都府舞鶴市 新谷 洋子
- ポーとしてひねもす雲を見る真昼犬が膝へと手を載せくれつ  
 京都府舞鶴市 新谷 洋子
- 柴犬のお母さんやと呼ばれて地域の子等を今朝も見送る  
 京都府舞鶴市 新谷 洋子
- 稲架掛けを数多飛び交うアキアカネ香を誘う陽に羽の耀う  
 岐阜県飛騨市 江尻 恵子
- 小銭入れの千円札のしわ伸ばし自販機に入る 冷茶一本  
 岡山県和気町 行正 健志
- ぼつねんと荒れ果て林霞む沼二本線引く波紋追いつつ  
 群馬県みなかみ町 野澤 武
- 白一つ高崎ダルマ眼に残し霞みし月日手術する頃  
 群馬県みなかみ町 野澤 武
- 開拓のみなかみ深く立つ煙あれが火の山いつ日登らん  
 群馬県みなかみ町 野澤 武
- 身を削る思ひの勤め十六年村長離職で楽々と居る  
 群馬県高山村 割田 良次
- DVの寂聴説法聴き終へて眠れぬ夜半の心静まる  
 群馬県高山村 割田 良次
- 戦ひに敗れし苦き思ひありユニセフ通しウクライナ支援  
 群馬県高山村 割田 良次
- 亡き妻の視線追ひくる思ひして鏡の前で着衣を質す  
 群馬県高山村 割田 良次

折々の思ひの遺る足跡を振り省りゐる九十二歳

群馬県高山村

割田 良次

廃校の庭に真白き百葉箱月影さやかに凜とたたずむ

群馬県伊勢崎市

木村 あい子

酸模の花咲きつづく土手にきて吹きくる風を立ち止まり聞く

群馬県伊勢崎市

木村 あい子

朝なさに灰になるまで女だと鏡に向う昭和の少女は

群馬県みなかみ町

手塚 光子

歳かさね計算になかつた老いと言う今の生活に知らされており

群馬県みなかみ町

手塚 光子

むなしさを抱きて歩む吾が肩に晩夏を惜しむか蝸の声

群馬県みなかみ町

手塚 光子

ただ今と声出し帰り靴を脱ぐ待ち入る人もおらぬ吾が家に

群馬県みなかみ町

手塚 光子

戦時下の物資不足が身につきて不用の品も処分できずに

群馬県みなかみ町

手塚 光子

モネの庭ヒメヒマワリの花群に風は光れり花は唱へり

大阪府堺市

名川 由江

葛の蔓手繰れば山の古狐恨みはないとひと声い鳴く

山口県光市

瀬戸内 光

男子には「勇」女子には「幸」の字の多き出席簿は国民学校

香川県丸亀市

寒川 靖子

眼鏡して天眼鏡を手にかざし三面記事に朝のしばしを

群馬県みなかみ町

林 好一

日に一度話しかけたる草花の今朝は一輪凜と咲きをり

群馬県みなかみ町

林 好一

豪雪に暮らせし山里半世紀余八十路の我は杖に頼らん

群馬県みなかみ町

林 好一

週一の買い出しメモを手に握りカートで泳ぐごとマスク確かに

群馬県みなかみ町

林 好一

久々の中天に見る満月に刈田の畔を黒き貨車行く

群馬県みなかみ町

林 好一

週二回友に会える日たのしみにデーサービスの車に乗れり

群馬県みなかみ町

品田 幸子

雲ひとつなき満月を拜す我れ孕寿半ばを幸に生き

群馬県みなかみ町

品田 幸子

白ばらのはらりひとひら散り始め玻璃戸の向かふに呼ばれたやうな

群馬県みなかみ町

眞庭 ヨシ子

獣医さんになれたらいいなど九つのかひなに眠る太めなうさぎ

群馬県みなかみ町

眞庭 ヨシ子

経塚とふ標の立てる小高に秋の風吹く村の入口

群馬県みなかみ町

眞庭 ヨシ子

映像に写し出される演習の母艦の姿不安が過ぎる

群馬県みなかみ町

倉田 富夫

姪の子の笑顔たまらんこっち見て母を追うのね願ひ叶わず

群馬県昭和村

加藤 南風

強風に煽られながら滝坂をおんぶに抱っこで下りゆく母

群馬県みなかみ町

本多 寿美枝

鯉のぼり歌の中にはいなくても赤い尾びれをなびかせて居る

群馬県みなかみ町

田中 春枝

ありがとうと言わずに渡したプレゼント窓際に咲くカーネーション

群馬県みなかみ町

大山 智也

庭先に綺麗に咲いたコスモスがなき母の夢みさせてくれる

群馬県みなかみ町 宮崎 りえ子

花柄のかつぽうぎを着て畑仕事おしゃべりしたり花見をしたり

群馬県みなかみ町 大山 真紀枝

どうしてる仲良くしてる休んでる問いかけ多い母のメール

群馬県片品村 金子 美由紀

月あかり母針仕事糸とおし私の役目いまよくわかり

群馬県みなかみ町 深代 里子

人生に悩んだ時母はいつも百パーセント私の味方

群馬県みなかみ町 小林 はつ江

一分の波音・人間の呼吸の数十八と知る 海の字に「母」

群馬県みなかみ町 篠原 香代

忙しく忘れっぽいが仕事するグラウンドゴルフボールも

群馬県みなかみ町 篠原 忠

母だからだからなんでもわたしなのザクザクたまる千切りの嵩

群馬県みなかみ町 小室 史

口笛は私をとおりぬける風 たのしい時も、かなしい時も

群馬県沼田市 山崎 杜人

子と読みし『はだしのゲン』まだ持ちており手垢と染みによこれたる漫画

新潟県新発田市 三浦 ユリコ

秋の空と同じ青き車きてデイスービスのおばさん消ゆ

新潟県新発田市 三浦 ユリコ

あえぎつつ山に登るは頂からの絶景知った魔法のせい

群馬県みなかみ町 ベネット 昭子

しわ伸ばしシート整のう友の手は介護の母を気づかうしぐさ

群馬県みなかみ町 ベネット 昭子

彼岸花いつの間になら咲き揃い暦センサー持つていららし

群馬県みなかみ町 ベネット 昭子

虫食ひのレースのごとき葉をつまみ青虫拾ふ秋陽射すなか

群馬県みなかみ町 荒木 洋子

雪降れば渋柿甘くなりしころ猿軍団と競ふ日のあり

群馬県みなかみ町 荒木 洋子

わが里も秋の風情のなきままに谷川岳に初雪の降る

群馬県みなかみ町 荒木 洋子

コロナ禍の小さな旅は牧水館海辺松原の歌碑にわが佇つ

神奈川県座間市 蓮見 孝子

喜寿までもわが思わざる長命に喜び哀しみ胸にはあまた

神奈川県座間市 蓮見 孝子

秋の陽を遮るものは地球のみ千里浜の海の果てに没りゆく

群馬県高崎市 井田 善啓

若いねとおだてられて登りゆく灯台までをガイドに合わせ

群馬県高崎市 井田 徳子

ひと夏の労を癒せとバスガイド唄と名所の説明をせし

群馬県みなかみ町 松井 とし子

道の端に黒くて長い帯が出来蛇と見まごふ蟻の門渡り

群馬県みなかみ町 長浜 利子

日本中震撼させるニュース見て防弾チョッキ必要な国に

群馬県みなかみ町 長浜 利子

研ぎ上げし鎌の切れ味心地良く作業は進み爽けし刈跡

群馬県みなかみ町 長浜 利子

象舎の象命の危険無ひけれど大草原を闊歩したいと

群馬県みなかみ町 長浜 利子

アナログの柱時計の秒針がカッカカッと気合ひをもらふ

群馬県みなかみ町 長浜 利子

角まるむ次郎柿の実剥く皮のつづく長さは七十五センチ

群馬県みなかみ町 林 恵美子

生なきに老ゆることなし亡夫の齢はるかに超えて曾孫の七人

群馬県みなかみ町 林 恵美子

来年もと百日草の種子とるを何処かで鬼が笑ひて御座らう

群馬県みなかみ町 林 恵美子

次郎柿いちどに熟れて残る実を丸ごと寝かす冷蔵庫の中

群馬県みなかみ町 林 恵美子

腓返り治せると言ふ本求め声だして読み自身に聞かす

群馬県みなかみ町 林 恵美子

天上の花園めざし秋空に煙りとなりて友のぼり逝く

群馬県みなかみ町 三池 幸子

秋日和慶喜の墓所巡り来て友と佇ずみ由緒記をよむ

群馬県みなかみ町 三池 幸子

寒風の樹々のふるえに背を丸め名画もとめて上野の森へ

群馬県みなかみ町 三池 幸子

世に残る証しを残すべくもなく日々の暮らしを黙々と紡ぐ

群馬県みなかみ町 三池 幸子

イベントに夜の駅前ひさびさに店の灯りに人波の影

群馬県みなかみ町 三池 幸子

詠みし歌の助詞の一つが気になりてそつと起きれば明けのこぼろぎ

群馬県みなかみ町 細川 のぶ子

亡き子への思ひは根雪消ゆるごと花に潤ふ長き年経て

群馬県みなかみ町 細川 のぶ子

唐辛子をコシヨと呼べる芸能人居りて笑えり同郷の我は

愛媛県新居浜市 大賀 康男

窓越しの月に一度の面会時間いつも心に言葉が残る

大分県国東市 原 比呂子

犬よりも先に逝かじと心配るも新型コロナウイルスは進化を続く

山形県鶴岡市 大沼 二三枝

印象はなんか間抜けと妻の言う前歯一本欠けしわが顔

群馬県川場村 桑原 謙一

透明な涙が白く乾く夏 茶色の葉となり旅する季秋

三重県津市 樋田 由美

命終のときを悟りて草のうへ精霊飛蝗が手をすり合はす

青森県八戸市 木立 徹

疫病あり戦の盡きぬこの地球されどしづかに運る惑星

埼玉県さいたま市 前田 明利

山高み越えざることにしばしばも挑みつづけしわが林住期

埼玉県さいたま市 前田 明利

日フィルのチケット葉に読む詩集 青春の日の残響を聞く

埼玉県さいたま市 前田 明利

向日葵にカメラ向けければ手の甲に蜻蛉とまりて翅を休める

東京都清瀬市 野原 てい子

面談の済みし家族の呼びかけに目を開け笑う茶寿のSさん

東京都清瀬市 野原 てい子

過去のこと忘れゆく夫を悲しめど吾を頼れる瞳愛しき

群馬県前橋市 鶴野 敏子

テキパキと宅配便のお兄さん去りし空気に香水ほのか

茨城県笠間市 飯田 初江



案山子にもマスクとふるさと魚沼の喜寿なる兄がメール寄こしぬ

東京都杉並区 庭野 治男

わらぶきの屋根借景に柿たわわ揚げ花火のごと里の賑わひ

群馬県みなかみ町 遠藤 長代

この恋を指折り数え詠う時交尾のトンボ秋空に舞う

宮崎県宮崎市 青山 昌子

秋の陽にひそりと咲ける萩の花古刹に似合う可憐で愛し

群馬県みなかみ町 増田 津恵

城山には沼田城守る城ありと芒踏み分け初紅葉狩り

群馬県みなかみ町 増田 津恵

力なく握り返えされ夫の手の温み忘れ得ぬ九年経つも

群馬県みなかみ町 増田 津恵

預かりし犬家の方向き吠え続け吾も泣きたい星の降る夜

群馬県みなかみ町 増田 津恵

先生と呼びし恩師の皆黄泉に身に沁む夜は星を探しに

群馬県みなかみ町 増田 津恵

帰省子の夢語る瞳の輝きてこの星の末案じつ見送る

群馬県みなかみ町 澁谷 典子

抗えぬ自然災害そここに人災までも止まぬこの星

群馬県みなかみ町 澁谷 典子

縁あってこの地で暮らす半世紀嫁母卒業祖母と命名

群馬県みなかみ町 澁谷 典子

百才を迎えし叔母は単々と何故に飽かずやお米のご飯と

群馬県みなかみ町 澁谷 典子

新藁で注連縄作る夫の背を夕陽が包む見守る如く

群馬県みなかみ町 澁谷 典子

露の世を共に暮して六十年幸せな日々藍青き地球

群馬県みなかみ町 眞庭 アイ子

神仏に今日の無事を祈りつつ両の手合せみあかしあげる

群馬県みなかみ町 眞庭 アイ子

親指の巻爪痛きを息に言へば膝に足乗せ爪切り呉るる

群馬県高崎市 湯浅 茂子

稲刈の終りし里を訪えば風のり聞こゆ祭ばやし

群馬県みなかみ町 木村 初枝

ひつじ田に二羽の白さぎ睦まじく心癒さる峡の夕暮

群馬県みなかみ町 木村 初枝

草もみじ野原で犬とたわむれる少年駈けゆく秋の夕暮

群馬県みなかみ町 木村 初枝

山ぼうし眺めつ登る須川宿真白きそば花そよ風にゆるる

群馬県みなかみ町 木村 初枝

良いことがあった日には日溜まりの洗濯物をハミングで取る

徳島県阿南市 坂東 典子

幼くて終戦の日に記憶なし戦後に育ち病む国に老ゆ

群馬県沼田市 保坂 スミ

逢ふ度に友と唄ひし荒城の月時経て今は墓前に唄ふ

群馬県沼田市 保坂 スミ

さやかなる月の光よ帰り行く君の行く手を明るく照らして

群馬県沼田市 保坂 スミ

雲ひとつなき青の中ただ一機サブマリンのごと飛行機は行く

鳥取県米子市 生田 麻也子

朝起きて笑いの中で我を見る顔に手足にへのへのもへじ

群馬県みなかみ町 倉田 富夫

届けたい物は薄手のカーディガン秋風察して京まで向かう

群馬県昭和村 加藤 南風

中三の修学旅行夜一人炭酸水は薬草の味

群馬県みなかみ町 本多 寿美枝

長瀬の荒川下る船の中右後ろ席水大当たり

群馬県みなかみ町 田中 春枝

ブカブカの浴衣を着ているピース写真六年前の今日の出来事

群馬県みなかみ町 大山 智也

父連れて町の旅館に一泊し食事にお風呂自然満喫

群馬県みなかみ町 宮崎 りえ子

土産やを端から全部はしごする試食し過ぎて満たされる腹

群馬県みなかみ町 大山 真紀枝

湯につかり明日はどこへとピカピカの笑顔ならぶ母の従姉妹会

群馬県片品村 金子 美由紀

草原に寝ころんでみる雲のたびふわふわ動く物語かな

群馬県みなかみ町 深代 里子

坂道を登っておりて伊香保の湯イベント終わり至福の時間

群馬県みなかみ町 小林 はつ江

沖縄に行く約束を取り付けてひつまぶしの蓋おか富士で開く

群馬県みなかみ町 篠原 香代

高速で朝早くからドライブを僕は助手席いざ新潟へ

群馬県みなかみ町 篠原 忠

時間旅行できるものなら会いたいな不純物なし十四の私

群馬県みなかみ町 小室 史

雪をまだゆきだと呼べる祖母と朝にバタロールをひとつ分け合う

群馬県沼田市 山崎 杜人

霧晴れしカールの映像目にすれば花・花・花に集むる虫たち

群馬県みなかみ町 吉田 まゆみ

逝きし義父は「ズボンの皺を伸してくれ」七七日の夢で語りぬ

群馬県みなかみ町 吉田 まゆみ

地球病む証のごとき大雨に家が丸ごと川流れくる

東京都町田市 谷川 治

手毬つくあどけなき子が知らぬ世の悲しき唄をさらりと歌ふ

東京都町田市 谷川 治

天河よりゆふべこぼれし滴かも小芋の葉の上のルビーの玉は

山口県宇部市 藤井 重行

「母さん」と呼びかける声の大きき緩和ケアという名の病棟

群馬県安中市 福田 誠

凜として日々を楽しく丁寧に皆に感謝で古希スタート

群馬県みなかみ町 島崎 牧蕉

病窓に閉ざされ居れば満開とふ木屋の香を記憶にぞ嗅ぐ

群馬県安中市 新井 八重子

言の葉を指先にのせ（ほら、カワセミ）絵巻のような山間をゆく

東京都武蔵野市 北谷 雪

公園の芝生広場に有る無しの風に宙浮く蜻蛉の群れ

群馬県高崎市 猪俣 軍司

「久しぶり」演奏会で友と会う別れて我の顔を見直す

群馬県みなかみ町 原澤 廣子

賑わいしスーパへの道閉店で人影もなく枯葉が遊ぶ

群馬県みなかみ町 原澤 廣子

久しぶりふるさとの畑耕せば父母の香残る秋の夕暮れ

群馬県みなかみ町 原澤 廣子

十三夜ススキを飾り月愛でる遠くの子等と写メ交換す

群馬県みなかみ町 原澤 廣子

水増さで「魚はどこにいるのか」と通学の子等尋ね寄り来る

群馬県みなかみ町 原澤 廣子

靖国の例祭と聞けば身にしみる戦に散りし兄を思ひて

群馬県みなかみ町 高橋 やま

過ぎし日の養蚕日誌めぐり見る秋の夜長を思ひ出にとつぷりつかる

群馬県みなかみ町 高橋 やま

秋空に誘はれ出向く野良仕事来期に備へ残渣片しぬ

群馬県川場村 林 郁男

ハトンの小屋に熟成せしみかん出荷す朝椿あしたの匂う

大阪府岸和田市 向井 靖雄

にこにこと挨拶をする幼子は夕方なれど「おはよう」と言う

群馬県榛東村 高橋 恵

姫女苑かたばみ露草すべりひゆ手張る雑草みな名前持つ

群馬県みなかみ町 細川 のぶ子

吊り草に二人並べば夕闇の窓に映った君と目が合う

埼玉県春日部市 藤澤 由紀

遠くから近づく君は我に気づき遠回りをしよそ見して来る

山口県光市 松本 進

牧水の紀行語りし「H君」再会おしみつ五十年過ぐ

群馬県前橋市 梅澤 祐一

暑ささけ公園に来て見晴せば上越の山 利根の清流

群馬県前橋市 梅澤 祐一

八十路越え感動少なく過しおり指折り作歌す生れ日を期し

群馬県前橋市 梅澤 祐一

カッコウを道ずれとして尾瀬の旅池塘をわたる吹く風すがし

群馬県みなかみ町 石坂 作次

ふるりの鎮守の杜に響きたる太々神楽 消え三年過ぐ

群馬県みなかみ町 石坂 作次

峡の里菜園犯す獣のかげ住み分け出来ぬ攻防むなし

群馬県みなかみ町 石坂 作次

遠く住む子等よりライン届きたる送りし野菜手料理豊かに

群馬県みなかみ町 石坂 作次

幼き日捕へてはしやぐ秋の日のよみがへりくる紅のいなごに

群馬県みなかみ町 中島 早苗

愛される猫の幸せさふな顔 見つむる 人の満たされし顔

群馬県みなかみ町 中島 早苗

叔父の夢 何でありしか思ひ遣る吾子より若き古き写真に

群馬県みなかみ町 中島 早苗

「イクメン」の言葉もなき日 アンデルセン聞かする父の弾む声覚ゆ

群馬県みなかみ町 中島 早苗

夕焼けに一羽で帰る白鷺の悲しみのこし秋は暮れ行く

群馬県みなかみ町 小野 朝耶

秋雨に学童歩く傘の道水面みずもに浮ぶ花の如くに

群馬県みなかみ町 小野 朝耶

母親の年をも越えて今にある路傍の暮し涙と生きる

群馬県みなかみ町 小野 朝耶

紅葉はなばなの狭に残る白菊の背伸びして見る晩秋の月

群馬県みなかみ町 小野 朝耶

文集に涙を落す母の顔牛馬の如くに生きたあの日を

群馬県みなかみ町 小野 朝耶

査定額待つ間の窓を過ぎてゆく児と手をふった特急草津

群馬県渋川市 忽滑谷 三枝子

軽快なリズムの音が降ってくる二階の息子はご機嫌らしい

愛知県岡崎市 西村 愛美

二千年の眠りから覚めし蓮の花上越の星と語り合ふらむ

愛知県岡崎市 西村 愛美

走り去る野良猫の啜える雀の目われにこびりついて離れず

愛知県岡崎市 西村 愛美

声掛けを素直に受くる我ありてそんな歳かと鏡をのぞく

香川県三豊市 上久保 忠彦

街路樹の銀杏の並木夕暮れてポトンコロコ音の弾めり

群馬県高崎市 神澤 静枝

風花に嬌声聞こゆる露天の湯耳を澄ませば異国語交じる

群馬県千代田町 大谷 光男

雨だれはラのフラットにドビュッシーは激しい雨で雨はもういい

群馬県千代田町 大谷 徳湖

つやつやのすすき穂ゆるる野の路に見上げてあたり半月の月

大阪府豊能町 熊ノ郷 紀子

玉忽やみかんの皮がたまりたるコンポストの蓋に春風の触る

大阪府豊能町 熊ノ郷 紀子

休日は野球練習とぞ孫ら近くへ住むに会ふは難し

東京都杉並区 堀井 邦子

島根は良い鮑の刺身、バター焼きしつかり大きなツノがついてて

山口県山陽小野田市 山縣 満里子

ビル壁に映る尖塔肉厚な鱗をもちり 冬に入る日よ

群馬県藤岡市 清水 静子

夢に來し祭りの法被着て笑う君をさがしてアルバムめくる

佐賀県唐津市 浦田 穂積

早朝の社参りで挨拶を交わす人らと朝焼け眺む

佐賀県唐津市 浦田 穂積

退院後体調戻りし連れ合いが手とり教えしシャツ豊み方

秋田県秋田市 照井 敬司

庭先に一匹だけの虫の声暗闇の中あなたに逢えた

大阪府柏原市 田倉 あけみ

リンゴ家とコメ家が婚約したって ひひ ここはコンニャクの里だし

群馬県みなかみ町 松浦 覺

五月雨をあつめて早し最上川 そ、そんな悠長な 松尾さん

群馬県みなかみ町 松浦 覺

先生「この割り算は余りです」生徒「ふうむ、いい心がけだ」

群馬県みなかみ町 松浦 覺

ふるりの馴染の山ももみぢ葉にコロナの波も凪て穏やか

群馬県みなかみ町 杉木 輝夫

縁あつて夫婦となりて五十年猶これからの愛こそ大事

群馬県みなかみ町 杉木 輝夫

久方の皆既月食鮮かに旧曆十月満月の夜

群馬県みなかみ町 杉木 輝夫

利根川に霧が流れて波静か朝日に輝やく岳の頂

群馬県みなかみ町 真庭 唯芳

聳え立つ谷川岳の紅葉に霧湧き上り霞む頂

群馬県みなかみ町 真庭 唯芳

年老いて幾春秋をさ迷えど心静かに我進みゆく

群馬県みなかみ町 真庭 唯芳

年老いて利根の流れは常しえに友は旅立ちて夕日侘しき

群馬県みなかみ町 真庭 唯芳

新月の暗き夜空に流れ星肩をすぼめて家路を急ぐ

群馬県みなかみ町 真庭 唯芳

娘よりマンゴ送られ今日の午後日づけかぞえてたべる楽しみ

群馬県みなかみ町 真庭 三枝子

このコップ誰がのんだかビールあじ私のみますアップルジュース

群馬県みなかみ町 真庭 三枝子

草むしり石垣あなより蛇のから私蛇年お金たまらず

群馬県みなかみ町 真庭 三枝子

おかえりの幟はためく只見線紅葉愛でつつ山峡をゆく

群馬県みなかみ町 原澤 芳雄

秋風が竹馬の友を連れて来るつもる話に温め酒酌む

群馬県みなかみ町 原澤 芳雄

山峡の野天湯温し星月夜紅葉愛でつつ瀬音聴きつつ

群馬県みなかみ町 原澤 芳雄

農仕事終えて見上げる西の空夕焼け小焼け明日も晴れか

群馬県みなかみ町 原澤 芳雄

宿場から宿場をつなぐ木曾街道溪の紅葉愛でつつ歩む

群馬県みなかみ町 原澤 芳雄

鮎色の採用通知見付けたりわが旅立ちを思ひおこせり

群馬県みなかみ町 石坂 喜美江

畑隅の青木の葉かげうぐひすの清しき声の秋立つ朝

群馬県みなかみ町 石坂 喜美江

谷川の枯葉散りしく阻道の奥の院古道数段上り来

群馬県みなかみ町 石坂 喜美江

焦点が針孔霞み目を擦る心の目力黒糸通す

群馬県みなかみ町 西形 きみ江

できたての曲を奏でて録音に遠くの友へ添付で贈る

群馬県みなかみ町 倉田 富夫

届く度期待高まるその中身昭和時代の夏と年末

群馬県昭和村 加藤 南風

無造作にあげると言われ渡された真珠のようなビーズの財布

群馬県みなかみ町 本多 寿美枝

仲の良い姉妹の様な胡蝶蘭誇らしく咲く白い援軍

群馬県みなかみ町 田中 春枝

有名なしやれた模様の包装紙我慢できずにビリビリにする

群馬県みなかみ町 大山 智也

息子から貰った白いトレーナー着てみて実感少し痩せよう

群馬県みなかみ町 宮崎 りえ子

最高の天使のような笑い顔 高価な物より心ときめく

群馬県みなかみ町 大山 真紀枝

七階で好み探して右往左往 貴方で溢れる至福の時間

群馬県片品村 金子 美由紀

贈物ドキドキうれしななんだろう老いても同じそっとひみつに

群馬県みなかみ町 深代 里子

息子からリンゴの札と孫達の口に頬張る画像が届く

群馬県みなかみ町 小林 はつ江

絡れたり絡まり切れて結ばれて紡がれてゆく人の縁は

群馬県みなかみ町 篠原 香代

品物は送った時に贈り物手紙のつけて愛しき人に

群馬県みなかみ町 篠原 忠

贈りものそれは亡き人たちが今残してくれた 記憶の粒子

群馬県みなかみ町 小室 史

あの雲と決めて形を言い合えばみいんな同じ雲を見ている

群馬県沼田市 山崎 杜人

カーテンを開ければ見える白い屋根朝の光で霜が消えゆく

群馬県みなかみ町 本多 義二

膝小僧異色の布で母の縫うジーンパン穿いて原宿歩く

群馬県みなかみ町 本多 義二

沢庵を樽から出して母の手に神業切りでつながっており

群馬県みなかみ町 本多 義二

誕生日何がいかと妹に「モンブラン」とすぐに答える

群馬県みなかみ町 本多 義二

四国へと地図を頼りに桂浜銅像横のちいさな自分

群馬県みなかみ町 本多 義二

亡き母の思い出深しアルバムは笑いと涙今も感じて

群馬県みなかみ町 原澤 君子

二年越し咲きほこる赤シクラメンスマホ片手にひなたぼっこ寝

群馬県みなかみ町 原澤 君子

野のあやめ離れて咲くは色濃て群れ咲く花の淡き色置く

群馬県みなかみ町 久野 とし子

抽ん出て竹の穂黄なり芽ぶくまえ朝露さらと茗ちつ光りぬ

群馬県みなかみ町 久野 とし子

母とわれ戦友の如く助けあい傍らで生き貧しき日々も

群馬県みなかみ町 久野 とし子

夕焼の色を落して利根川の川面を染める時を惜しみつ

群馬県みなかみ町 久野 とし子

山ねむる山につつまれ湖ねむる楽しき春の訪れるまで

群馬県みなかみ町 久野 とし子

牧水の泊りし湯宿温泉は二階の小部屋今も残りぬ

群馬県みなかみ町 大川 美知子

無人駅に電車を待てば雷遠く鳴りて遙かに虹立つが見ゆ

群馬県みなかみ町 大川 美知子

早すぎる時の流れに七回忌笑顔の弟面影偲ぶ

群馬県みなかみ町 大川 美知子

熱すぎる窪湯にがまんの身を置けば 牧水もかく入りたる 顔浮かびくる

群馬県みなかみ町 甲斐 陽子

温泉の 高窓から降る蝉の声 湯舟に 落ちて 夏 流れ去りゆく

群馬県みなかみ町 甲斐 陽子

カナカナ蝉の 急かされるよな 夕暮に別れも告げず 逝った人おもう

群馬県みなかみ町 甲斐 陽子

湯宿の熱湯をあがり 空見れば 神無の三日月シャキーンと てっぺんを刺す

群馬県みなかみ町 甲斐 陽子

牧水の宿金田屋に月光さす白壁の 内より今も聞こえる 師弟談義のざわめき

群馬県みなかみ町 甲斐 陽子

ゑびす講沼田城下の本通り祇園囃子に歩行者天国の路

群馬県みなかみ町 諸田 弘

秋日和同胞揃い墓参り故人を偲ぶ久久の旅

埼玉県三芳町 高橋 残光

八十になんなんとして思へるはへ老いに吹く風追風とせん

福岡県大牟田市 西山 博幸

台の辺に足うら載せて爪を切る母あらばきつと叱るだろうよ

福岡県大牟田市 西山 博幸

おおらかに明朗なればいいのよと志功の女神に諭されており

愛知県岡崎市 中村 佐世子

子宮なき女になりてしまいたり中城ふみ子急に思えり

愛知県岡崎市 中村 佐世子

ゆく秋の東茶屋街中の橋泉鏡花の女前に立ち来ぬ

愛知県岡崎市 中村 佐世子

長き間をオルゴールの芯傷みおり『禁じられた遊び』歪に響く

愛知県岡崎市 中村 佐世子

カレンダーに書かれし短歌は草書体読み得ぬ我が身のもどかしかりき

愛知県岡崎市 中村 佐世子

少しでも我より若き年なればにつこり微笑むその心とは

神奈川県横浜市 高山 克子

恐恐とガラスの階段降りんとすさつと差し出さるる手の暖かさ

神奈川県横浜市 高山 克子

コマージュシャルあなたに似てる俳優のしばしば出ればもう目をそらす

神奈川県横浜市 高山 克子

ゆくりなく祈祷の声はとどろきて冷気を破る山中の寺

群馬県高崎市 石井 省三

新生姜のピクルス澄みたる紅にきつと秘境のモルゲンロート

広島県広島市 小野 系子

二次会は台詞も込みで「寅さん」を賢治を愛する主任が歌ふ

群馬県渋川市 木暮 由利子

「あ、そうか」とうなづく母が愉しくて同じ話を何度でもする

秋田県秋田市 加藤 隆枝

「元氣です」林檎はみ出し字大きく病める友より届きたる秋

秋田県秋田市 篠田 和香子

若き日に夫の命の水筒が声なき声に語る戦争

京都府福知山市 阪根 まさの

爆睡の里帰りの娘年取れど暴れ寝相は幼き日なり

宮城県日向市 黒木 栄一

訪う吾に玄関越しに接触はできぬという叔母 林檎置き帰る

岐阜県飛騨市 横山 美保子

夢の字はまさにアートと友は言ふひと角擦れて夢そのものに

群馬県太田市 白石 政江

山の青湖の青さに魅せられて移り住み来し大正の詩人

群馬県太田市 白石 政江

突然のコロナウイルス現れる今後十年続けば闇

大阪府大阪市 水上之川

戦後にて朝鮮半島分断す百年続けば落ち着かず

大阪府大阪市 水上之川

東京パラリンピック開かれる体障有つても光る

大阪府大阪市 水上之川

五年後にクールドマスターズ開かれる全ての競技形態素敵

大阪府大阪市 水上之川

短歌とは俳句の仲間いつまでも我短歌考えた後作る

大阪府大阪市 水上之川

樺林の紅葉進む空青く鹿の親子か山路越へゆく

千葉県市川市 松田 恵子

小川氏の栄枯の歴史見つめつつ五百余年城趾めぐる

群馬県みなかみ町 看 雪

蒸し暑い午後の山沿いもくもくと遠くで響くカミナリの音

群馬県みなかみ町 R y o

年重ね愛しい人にめぐり逢い人生残り君だけ想う	群馬県みなかみ町	R	Y	O	後藤 明美
夜は更けて睡魔に襲われベットの 中瞼を閉じると君がいる	群馬県みなかみ町	R	Y	O	大塚 とみこ
大あくび瞼仲よく眠たいよちよつと憂うつな霧雨の朝	群馬県みなかみ町	R	Y	O	大塚 とみこ
霧探し夕暮れせまる峠道無の世界へと吸い込まれゆく	群馬県みなかみ町	R	Y	O	ハリ お
見上げればオリオン輝く夜明け前茜に染る東の稜線	群馬県みなかみ町	R	Y	O	湯浅 慧子
晩秋の夕暮れ迫る西の空ひときわ輝く一番星	群馬県みなかみ町	R	Y	O	佐藤 直大
雪は舞い手のひらで溶た結晶が白く染めゆく冬のおとずれ	群馬県みなかみ町	R	Y	O	佐藤 直大
時流れ君の面影薄れゆくでも思い出は心の中に	群馬県みなかみ町	R	Y	O	近藤 千壽
からっ風わらべのほほまっかつかそれもまたかわいいう上州子	群馬県みなかみ町	R	Y	O	高倉 嶸風
別れにて心淋しく日々過ごしコロナ重なり出不精となる	群馬県みなかみ町	R	Y	O	松本 由美子
豪雪の越後の峰に春迎え何に見えるー残雪模様	群馬県みなかみ町	R	Y	O	佐藤 真理子
花吹雪桜舞い散る春の風可憐な時は短く感じる	群馬県みなかみ町	R	Y	O	清水 良郎
雪女君のハートは暖かいどこにいるのか俺の恋人	群馬県みなかみ町	R	Y	O	井澤 栄一
気に入りの柔軟剤に包まれる君のTシャツ私のブラウス	北海道札幌市				後藤 明美
唾棄すべき思い蠢き水無月の雨に仮面の眼が滲む	群馬県高崎市				大塚 とみこ
母の髪いつもちりちりほんとはねたくて真っ直ぐ私のみたく	群馬県高崎市				大塚 とみこ
月光を乗せた小舟は湖のなみだがごとく静かにつたう	茨城県結城市				ハリ お
輝を踏みて歩む霜月の子を失いし母心しのぶ	群馬県高崎市				湯浅 慧子
天高く翼を折らず鳥のごと心を折らず地上を生きたし	東京都中央区				佐藤 直大
やがて来るその日までの「ただいま」と「おかえり」交互に奇跡のシーソー	東京都中央区				佐藤 直大
古びたる大看板に「畳」一字 堂々坐したり満月の夜	神奈川県藤沢市				近藤 千壽
錦秋の溪谷深き八ツ場ダム音這い上る虹の中から	群馬県沼田市				高倉 嶸風
悲しみは根雪のごとく積もるもの温みて消ゆまた雪のごとくに	群馬県高崎市				松本 由美子
実の成るも成らぬもありて石榴の木境なき空へ朱輝かす	群馬県高崎市				佐藤 真理子
ラグビーのビデオジャッジの映像に何度も映る冬のたんぼぼ	愛知県名古屋				清水 良郎
出稼の友と語りぬ啄木の油染み手互見つむる	長野県飯綱町				井澤 栄一



癒ゆる日の来るか来ないか夫が呼ぶきれいな夕焼け一緒に見よう

群馬県前橋市 中澤 ひろみ

二千キロ旅する蝶よぶフジバカマ母のホームの中庭に咲く

群馬県前橋市 中澤 ひろみ

否応のない孤独です誰かでは埋められないし埋めたくもない

大阪府羽曳野市 凛 七星

漂泊のいづこの町で酒を酌みいざよふ月の淡き寂しさ

大阪府羽曳野市 凛 七星

控へとふ役目はあれど余り苗選られず終る一生ありなむ

滋賀県大津市 船岡 房公

蝸の声に旋律ありと聴く十日余りの命を謳え

神奈川県愛川町 富田 茂子

庭隅の猫の小さき墓石に添うがに二つ三つ咲く彼岸花

神奈川県愛川町 富田 茂子

門前に園児の列と出くはせば元気なあいさつ是はへ花丸ぞ

岡山県倉敷市 三宅 照司

献血の年齢制限に打ち止めか、半端に悔やむ五十四回

岡山県倉敷市 三宅 照司

角膜を提供します純愛を貰いたので星に合います

岡山県瀬戸内市 小橋 辰矢

「お月様つかまえたよ」のLINE来て指の輪の中閉ぢ込めた月

石川県金沢市 橋本 枝折

洪水などなかつたやうに鎮もりて猿の一むれ堰渡りゆく

石川県金沢市 橋本 枝折

朝日受くビル群ゆつくり近付きぬ只今接岸この地で生きる

大阪府河内長野市 木村 嘉子

一度だけもう一度だけ母さんに「まゆみ、来たか」と呼ばれてみたい

秋田県秋田市 蓬田 真弓

来春に閉じゆく学舎を抱きつつ最後の季を山は粧う

秋田県秋田市 蓬田 真弓

われら此処に生きた証を託されて学び舎跡に石碑は建ちぬ

秋田県秋田市 蓬田 真弓

晩秋の未明の雨は寂しくて病む人しばし眠れと祈る

秋田県秋田市 蓬田 真弓

「前を向き歩いてゆく」と呟いた母亡き人の冬を思いぬ

秋田県秋田市 蓬田 真弓

搦きたての餅買う列に並びいる農業祭の秋晴れの中

京都府舞鶴市 鯨本 ミツ子

問診の度に医師が言ふ転ぶなと骨折すれば寝たきりになると

群馬県沼田市 今井 栄一

ありがとう用意して待つこの部屋の景色は君で優しく変わる

群馬県沼田市 桑原 環世

一日が十日になって一ヶ月続けば私の法則になる

群馬県沼田市 桑原 環世

百年の山路偲びし暮坂の枯野のかなた影はまぼろし

群馬県中之条町 島村 暁星

初雪よ太平山は青いわよ筆談せし君いまはかなわず

秋田県秋田市 高村 正広

泣く赤子襁褓替えよと教壇の師かく学び級友よ元氣か

群馬県前橋市 山口 タツ子

父祖の地をダムに差し出し追われたる異郷はかなしと友の文出す

群馬県前橋市 山口 タツ子

利根川に四巨大ダム青くあり清き流れを見ることがもなく

群馬県前橋市

山口 タツ子

久々に幼なじみと近況を聴えし言葉寂しさを知る

群馬県みなかみ町

小林 和子

亡き姑ははが持っていたのいろいろと良き事ばかり思い出すのは

群馬県みなかみ町

小林 和子

お父さん長い人生頑張ったよね空の上から見守っていて

群馬県沼田市

一 花

毎年の季節が変わる変わり目に歳を感じる頭の寒さ

群馬県沼田市

一 花

嫁さんが何日いない家の中今気付いたよ心のすき間

群馬県沼田市

一 花

恒例のお正月にお雑煮をお餅ふくらむ私ふくらむ

群馬県沼田市

一 花

待ちわびた今年最後の月食家族みんなで幸せの時

群馬県沼田市

一 花

雪虫が飛んで来そうな軽井沢父の背超えるバージンロード

群馬県みなかみ町

夏 花

半世紀ピンチになると現れる姉は私のスーパーウーマン

群馬県みなかみ町

夏 花

姉が云う魔法の言葉「大丈夫」千回言えば怖さ無くなる

群馬県みなかみ町

夏 花

入院中誘惑に負けコンビニへ 買ったがプリン食べてはならぬ

群馬県みなかみ町

夏 花

寄りかかる背中柱の黒光り残像語る強く生きると

群馬県みなかみ町

夏 花

だいたいがあかになつたりオレンジにきいろにちやいろ秋のおさんぽ  
群馬県みなかみ町 小室 史

第六回若山牧水みなかみ紀行短歌大会作品集

令和5年3月発行

編集／発行 若山牧水みなかみ紀行短歌大会実行委員会

〒379 | 1305

群馬県利根郡みなかみ町後閑321 | 1

みなかみ町教育委員会 生涯学習課内

電話0278 (25) 5025





令和4年度若山牧水みなかみ紀行短歌大会補助事業

第6回若山牧水みなかみ紀行短歌大会

開催日 令和5年(2023)3月5日(日)

会場 猿ヶ京温泉 でんでこ座三国館

群馬県利根郡みなかみ町猿ヶ京温泉 1150-1

主催 若山牧水みなかみ紀行短歌大会実行委員会

協力 みなかみ町牧水会

後援 みなかみ町・みなかみ町教育委員会・おちあいしんぶんマイタウン  
たにがわ・沼田エフエム放送株式会社・三成社株式会社  
(一財)三国路与謝野晶子紀行文学館

